
A collection of short stories

るうあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A c c e l l e c t i o n o f s h o r t s t o r i e s

【Nコード】

N 1 2 7 1 Z

【作者名】

るうあ

【あらすじ】

こちらの短編小説は創作企画【みんなで100題】に投稿したものです。各一話ごとの読み切りですが、中には連作となっているものもあります。

平凡な日常の恋物語。一部恋話メインでないものもふくまれています。

【注】R15の記載はごく一部の話だけとなっています。

輝石

夜の街を白く染め上げるように降っていた雪も今は止み、すでに融けはじめ、消えていこうとしている。

わたしは独り、少し足早になって目的地へと急ぐ。

誰と約束しているわけでもない。……わたしだけを待っていてくれるわけでもない。

けれど、そこは暖かくわたしを迎え入れてくれるだろう。

そう……、今夜も変わらずに。

* * *

馴染みのバーで、一人グラスを傾けていると、カウンターの向こう、バーテンダーの彼が意味深な笑顔を向けてきた。モスコミュールを半分以上空け、次は何を飲もうかと考え始めた頃だった。

「何か良いことでもありましたか？」

いつも丁寧な口調で、気さくな笑顔を向けてくれるバーテンダーの彼、三井倉理さんともすっかり顔なじみになっている。

彼の年齢は知らないけれど、わたしとそんなには変わらないだろう。三十はいつてないように思うけれど、穏やかで落ち着いた雰囲気を持っていて、ひどく年齢差を感じさせる時もある。職業柄かもしれない。

「どうして？ そんな風に見えますか、わたし」

訊き返すと、彼は「いえ、なんとなく」と曖昧に応え、わたしの手元を気にしているようでもあったけれど、先はぼかした。

良いことでもありましたかと問われても、別段「良いこと」はなかった……ように思う。とくにこれといって思い浮かばない。もちろん悪いこともなくて、今日は一日、いつもと何ら変わりのない平々

凡々とした日だった。

そもそも、わたしという人間自体が平凡なのだ。外見的にも十人並み。これといった特徴もない。髪は肩甲骨にかかるかかからないかという長さで、出勤時はたいていシュシュで一つにまとめているか、バレッタで留めているかしている。もともと地味な顔立ちの上、そうして髪を一つにまとめているとさらに地味さが増して、他人にまで「老けてみえちゃわない？」と指摘される始末だ。だからといって、流行りのメイクやファッションで身を包むのは、どうも好きじゃない。というより、似合わないだろう。

日々の生活も、大きなトラブルなんてほぼ皆無と言ってよく、地味で平凡そのもの。波乱万丈でドラマチックな人生に憧れなくもないけれど、やっぱり平穩が一番だと思ってる。二十数年かけて培われてきた凡庸な性格は今更もうなおしうがなく、そうした性格に合った面白みのない人生をこれから歩んでいくんだろうなと思ってる。諦念というより、臆しているのかも。

変化を望む気持ちより変化を怖れる気持ちの方が年齢を重ねる毎に強くなるようだ。

そして今日も、だ…

ため息をつく、不意に彼と目があつた。

彼はわたしの前に「フローズン・ダイキリ」をそつと置く。

「雪はもうやんだようですね」

「ええ。積もらなくてよかったような残念なような」

わたしは小さく笑って、彼が作ってくれたダイキリを手元に寄せた。

シャンパングラスにクラッシュドアイスを盛ったフローズン・ダイキリを味わうのは久しぶりだ。

「おいしい」

「ありがとうございます」

「あ、良いことあったわ。今、こうしてとびきりおいしいカクテルをいただけて」

「それは……、嬉しいことを言ってくれますね、晶枝さん」あきえ

「お世辞じゃないですよ？ 本当においしいからこうして頻々と来てるんです」

「ええ」

彼の涼やかな目元がやわらいだ。

営業スマイルというものなんだろうけど、それがとても自然で、嫌味がない。

当たりの柔らかい笑顔と話し方。それは彼の作ってくれるカクテルのように、すんなりと受け入れられる。そして心を落ち着かせ、一方で程良い熱も与えてくれる。

カウンターの外にいる三井倉さんはどんなだろうと、時々思う。想像がつかない。

この店でしか会ったことがなく、しかも時間は夜。控えめな照明の下でしか、彼の笑顔を見たことがない。

想像がつかないのだって当然だ。だから、なおさら知りたくなる。彼と二人で話すようになって、一年近くが経つ。

話の内容は他愛ないものばかりだ。わたしが彼に質問をすることが多い。それぞれのカクテルの名の由来やレシピ、それに料理の話もする。料理の話は、わたしもそれなりに好きで色々作ったりもするから、お互いの得意メニューのレシピを教え合ったりもした。それから日常で起こったささやかな笑い話や、たまには愚痴めいたことも吐露したりする。

けれど、わたしも彼も、個人情報それはそれほど打ち明けない。

だからわたしは、バーテンダーの「三井倉理さん」しか知らない。彼もまたわたしのことは、常連客の一人としてしか認識していないだろう。名前と顔が一致し、好きなカクテルを憶えているという程度だろう。バーテンダーとして、常連客の嗜好を憶えるのも仕事の一つだろうから。

二月半ば、まだまだ寒い日が続いて、今日だけではなく先週も雪の降った日があった。

先週とは違い、今日の雪は短時間でやんでしまった。積もったら積もったで困ることが多いから文句も出てしまうのだけど、やはり雪は好きだ。

そして好きといえば、この店のカクテル。もちろん店の雰囲気自体も好きで、月に何度か…さすがに週一とはいかないけれど…大抵は一人で来る。女友達を連れてきたこともあるけれど、恋人は、ない。

バーテンダーの彼に目をやると、彼は別の客のためにカクテルを作っていた。

グレイプフルーツジュースをつかった「スプモーニ」と、ブランドーベースの「サイドカー」は、わたしの後方のテーブル席にっているカッパルの注文だったようだ。和やかに談笑している。

他にも客はいるけれど、二人、ないしは四人でテーブルを囲んでいて、カウンター席には、わたしだけが座っている。こんな贅沢なことはめったにない。

いつもカウンターの席に座るのだけど、大抵は先客がいて、カウンター席を一人占めできたのは、今夜が初めてかもしれない。

わたしは彼に作ってもらったカクテルと、落ち着いた店の雰囲気、そして彼が「特別サービスです」と悪戯っぽく笑って差し出してくれたつまみ…ラムのきいた生チョコを堪能していた。

ラムを使ったカクテル「ダイキリ」は、ドライジンをベースにしたカクテル「ホワイト・レディー」に次いでわたしの気に入りのカクテルだ。

わりあい簡単に作れるカクテルなのだけど、簡単なだけに、おいしく作ってくれる店はけっこう稀…だと思う。

その貴重なお店が、今わたしがいる店。おいしいカクテルを提供してくれるバーテンダーのいる店。

それがここ、知人に紹介してもらったカクテルバー「Mimos a」だ。もちろん……とっていいのか、社団法人日本バーテンダー協会の加盟店だ。

わたしはこのお店を紹介してもらったまで、日本バーテンダー協会（NIPPON BARTENDERS ASSOCIATION）略してN・B・A・）なるものがあることすら知らなかった。それどころかバーテンダーの「認定資格」があることも知らなかった。「日本では、とくに資格がなくても働けるんですけど、就職時にはやはり有利ですよ。実力の証明書みたいなものですから」

一応僕も持っていますよと、三井倉さんは微笑して付け足した。彼が有しているNBA認定の証書は二つ。バーテンダー資格証書とバーテンダー技能検定合格証書。

「IBA認定のインターナショナル・バーテンダー資格証書も取りたいんですが、これはまだ先になりますね。経験年数が足りないこともあるけれど、何より技術的にも知識的にもまだ足りてないところが多いから」

技能検定の合格証書をとったのは、去年のことだという。年に一回の試験だそうで、一昨年は不合格だったらしい。カクテルバー「Mimos a」の雇われバーテンダーの彼は、まだまだ勉強中の身だと、自らを語る。

わたしは「すごいですね」と心から感嘆したものだ。明確な未来設計をもつて、そのために頑張っている彼は本当にすごいと思う。平凡な生活の上に胡坐をかいて、積極的に行動を起こさないわたしとは雲泥の差だ。比べることすら申し訳ない。

彼は尊敬に値する人物だ。

尊敬している分だけ、……遠い。

三井倉さんとの距離をしみじみと感じていた。

やにわに、彼が訊いてきた。

「その指輪の石は、もしかしてアメジストですか？」

本日二杯目のダイキリ、フローズンではなく、ごく普通のダイキリを注文し終えた時のことだ。

問われて、一瞬戸惑ったけれど、わたしは左手を軽くあげ、「あたりです」と答えた。

「よく分かりましたね。こんなに小さいのに」

左手の小指にはめられているピンキーリングは、天然石の専門シヨップで今日買ったばかりのものだ。シルバーのリングに台座なしで嵌め込まれている、小さなアメジスト。石も小さいけれど、リングも細いし、第一ピンキーリングだから、彼は気付かないだろうと思っていた。

「ええ、まあ……」

彼は曖昧に笑って、躊躇いがちに質問を重ねてきた。

「その指輪はもしや、贈り物？」

「え？」

彼が、こういうプライベートな質問をするのは珍しい。それでちょつと戸惑ってしまった。

彼の唐突な質問に鼓動が素直すぎるほどに、高鳴った。

なんだかそれが口惜しくて……気恥ずかしくて、らしくなく勿体ぶって答えた。

「そうね、贈り物と言えば、そうかも」

「……そうですか」

シェーカーのボディーに氷を入れようとしていた、彼の手が止まった。

わたしは小首をかしげ、すぐに次の句を継いだ。

「自分からの、ね。前から欲しくて探していたの、アメジストのピンキーリング。それで今日、偶然、好みのデザインのものを見つけ、即、買っちゃったってわけなの」

「ああ、じゃあそれが、良いことだったというわけですね？」

「あ、そうね。そういえば。うーん、でもやっぱり今日の一番良いことは、おいしいフローズン・ダイキリを飲めたこと。あんなにお

いいフローズン・ダイキリは本当に久しぶりだったから」

「上手ですね」

「本心なんだけどな。それはともかく、ピンキーリングは、そりゃあ見つけられてラッキーだったけど、自分で自分に贈り物っていうか、ご褒美って、今日なんかは少し微妙な気分だから、良いことっていうにはちよっと、……ね」

わたしは肩を竦めて苦笑した。

そう、だって今日は二月十四日。

バレンタインデーだ。

バレンタインデーそのものは、嫌いなイベントじゃない。かといって、乗り気になれるイベントでもなかった。

今日も、とくにチョコレートをあげた人はいない。

会社で義理チョコを配っている人もいたし、友達同士でお菓子を交換してる子達もいた。だからといって、自分もそれに倣ってチョコレートを上司達に配りまくろうなんて気には全然なかった。これは学生の頃から変わらない。……「本命チョコ」ならあげたことはあるけれど、それはもう随分と前の話だ。

わたしはちらりと三井倉さんを見やった。

用意してくればよかったかなと、心の隅で思わないでもない。

だけど客から贈られるチョコなんて、そんなに嬉しいものじゃないだろう。なにより、わたしが嫌だ。　「義理チョコ」に思われちゃうのは。

「アメジストは」

カウンターの向こう、彼はわたしのためにカクテルを作ってくれようとしていた。グラスを用意するために一度その場から離れたけれど、すぐに戻ってきた。

用意されたカクテルグラスは、わたしが座っている位置からは、並べられた様々な種類の瓶や新鮮なフルーツの盛られた藤籠などに隠されて、ちょうど見えない。

彼が、わたしを見つめて言った。

「アメジストは、二月の誕生石でしたね？」

「ええ。よく知ってますね。そういうことにも詳しいんですか？」

「さあ、詳しいというほどではありませんが」

話を一旦止め、彼はシェーカーを振る。そしていつも通り慣れた手つきで、グラスにシェーカーされたカクテルを注ぐ。

「アメジストの名の由来は、ギリシア語でしたね。酒に酔わない、という」

「へえ……。それは知らなかったな。やっぱり三井倉さん、詳しいですね」

「まあ、それなりです」

彼は、わたしの前にカクテルグラスを置く。ダイキリは、無色透明のカクテルだ。グラスも同様に、なんの色も柄もない、透明のカクテルグラス。

「……あ、の……。これ、は」

カクテルグラスの中、いつもなら入っていない物が沈んでいた。

……氷ではない。フルーツでもない。照明の光を受け、控えめな輝きを見せている、紫色のそれ。

「そうしてアメジストを入れておくと、酒に酔わないといえますよ」
「で、でも……っ」

カクテルグラスに沈んでいるのは、アメジストではあるけれど、それ以前に……

戸惑うわたしに、彼がとびきり優しい笑顔を見せて言った。

「誕生日おめでとう、晶枝さん」

「……………」

わたしは絶句していた。……どうして知っているのかと訊くこともできない。みるみるうちに頬が熱っていくのが、自分でもわかる。まるで、初な少女にもどったようだ。胸がどきどきと高鳴っている。
「今日、誕生日だったよね？ 前に一度、バレンタインデーが誕生日なんて、なんか微妙な日に生まれちゃったなあってこぼしたの、

憶えてない？」

彼は急に口調を変えてきた。それは、バーテンダーではない、素のままの三井倉さんの口調なのだろうか。

「よ、よく、憶えてましたね……」

「うん。気になる人のことだから、気に留めてた」

……今、なんて…？

「誕生日だし、ついでに言えばバレンタインデーだから、その機に乗じてみようと思って。だからチョコレートも用意してみた。ああ、義理じゃないよ。本命だから」

彼が特別にと言って出してくれた、生チョコ。それを見てまた絶句した。

「……………」

我ながらなんて鈍いんだろうと焦ったけれど、気付かなくなつてしょうがない。だって、こんなの想定外だもの……！

わたしは動揺しきつて、出されたダイキリを飲む余裕もない。けれど彼は優しく微笑んで、「冷たいうちにどうぞ」と促してくれた。

わたしはぎこちなく頷いて、冷えたダイキリを一口、口に含む。

口の中で、フレッシュライムの爽やかな香りが広がった。嚥下すると、それがきつかけとなって胸が開いていく。

カクテルグラスを持つ手が震えていないのが不思議なくらい、どぎまぎしている。三井倉さんのまっすぐなまなざしを受けているのが恥ずかしい。

俯いて、そしてグラスの中、ダイキリに浸されているアメジストの指輪を見つめた。

その後、「要らないなら、そのままグラスに入れておいて」と言った彼に、わたしはとんでもないとばかりに首を横に振って応え、それがそのまま、彼の気持ちの応えになった。

散歩

ひどく蒸し暑い。空を見ると、むくむくと立ち上がっている入道雲だけでなく、灰色の重たげな雲が群がってきていた。

一雨くるかもしれないな。

彼がそう言つて空を見やったのに倣い、少し後ろを歩いていた彼女もまた空を見上げる。その直後だった。

ガツと鈍い音がして、「いったあいつ！」という声が上がった。

「どうした、美晶？」と彼が驚いて振り返ると、彼女 美晶はその場にへたり込んでいた。どうやら側溝のコンクリートの僅かな隙間に、ミュールの踵がはまり、その拍子に足首を捻ったらしい。

美晶は左の足首をさすりながら、「尚くん、痛いよう」と、ちょっと情けないような恥ずかしいような顔を、彼 尚之に晒した。

「大丈夫……じゃ、なさそうだな？」

「折れちゃったかもっ！」

「そんな程度で折れるわけないだろう」

と言いつつ、尚之は内心、美晶のきゅっと締まった細い足首は、ほんの少しの衝撃でも折れてしまうのではないかと思っていた。

実のところ、美晶が「折れちゃったかも」と不安がったのは、自分の足ではなく、買ったばかりのミュールの踵のことだった。しかしそれを言えば尚之を呆れさせてしまう気がして、黙っておくことにした。

「捻ったんだろう。ああ、無理に動かして体重かけるなよ？」

「うん……」

美晶は頬と鼻の頭と目を赤くしている。痛がっているが、アスファルトにぼてりとお尻を落とさない。不安定な格好で、その場にしゃがみこんでいる。

「ほら、手を貸せ。支えてやるから」

尚之は口調だけでなく、顔つきもどちらかといえば無愛想で、強面だ。だが、心根の優しい人だということは、美晶はもうずっと昔から知っている。尚之が、美晶のドジっぷりをよく知っているのと同じくらいに。

「ん……」

「立てそうか？」

「どうにか……」

どうにか、と美晶は言うが、やはり相当に痛いらしく、立とうにも立てないと困った顔をした。

「……しようがないな」

尚之はため息をつき、それから軽々と美晶を抱き上げた。

美晶が「わっ」と驚きの声を上げると、尚之は「つかまってる」と首に腕を回すよう美晶を促した。

「と、靴が落ちたな。……拾えるか？」

「う、うん」

突然のことに美晶は焦ったが、尚之は顔色一つ変えない。尚之は落ちた靴を美晶に拾わせるため一度腰を落とした。美晶は両の足から脱げてしまったミニールを急いで拾い、それを確かめると尚之はまた腰を伸ばした。

「尚くん、ごめんね？ お、重たいでしょ？」

「ああ」

「そういう時はウソでも重たくないって言うの！」

美晶はむうつと頬を膨らませて、文句をつける。ふくれっ面の美晶は、とても成人式を三年前に済ませたとは思えない子供っぽさがある。童顔というわけでもないのだが、所作の一つ一つがあどけなく、少女っぽい。五年前に出逢った頃から、そういうところはちっとも変わらない。

尚之は口元を綻ばせ、

「重たくない。ウソじゃなく」

と、訂正した。

* * *

両親の理解を得て、尚之と美晶が同棲生活を始めたのは、つい昨日のことだ。

そして今日は日曜日。アパート周辺を見て回ろうと、二人は散歩に出た。小一時間ほど、スーパーやらコンビニやらレンタル屋やらの在り処を確かめるために歩き回り、そろそろアパートに戻ろうか、というところだった、美晶が躓いたのは。

「尚くん、ごめんね」と申し訳なさそうに言いながら、しかし美晶の頬は緩みっぱなしだった。

まだ日は明るく、そろそろ昼食時かという時間帯だ。大通りからは離れ、少し奥まったところとはいえ、人の往来がないわけではない。そんな中、「お姫様だっこ」されているとは。

人の目が恥ずかしい。だけど、ちよつと嬉しかった。

尚之は辛そうな顔一つせず涼しい顔をして美晶を抱きかかえている。そして大股な足取りで、二人の「愛の巣」へと向かっている。

こんな頼りがいのあるステキな男の人が、わたしの恋人なのよ！という誇りと自慢が美晶をニヤつかせている。

美晶はふと思いついて、

「その公園を通っていいこうよ」

と、提案した。公園を横切っていけば、アパートへの最短距離だ。「最近できたばかりみたいだね。遊具がまだ全然なくて、ちよつとさびしいな」

公園の様子が見たかったと美晶は言う。抱きかかえられているのは嬉しいが、尚之に負担をかけ続けるのは申し訳ないと思っている美晶なりの、ちよつとした気遣いだった。

それに気付かない尚之ではない。

公園内は、ちょうど昼時ということもあってだろう、誰もおらず、閑散としていた。

「公園で、少し休んでくか？」

「うん。……雨、まだ大丈夫そうだもんね。あ、あそこにベンチあるよ」

「ああ」

美晶が指さしたベンチは、動物の形をしていた。一つはパンダで、一つはクマ、一つはトラ。まだま新しいため、ペンキの色も剥がれていない。

尚之が美晶をおろしたのは、クマのベンチだ。

「足はどうだ？」

尚之に訊かれて、美晶はミュールを履きなおしながら、「もういいみたい」とほんのちよつと嘘をついた。

今日履いたミュールは、尚之と一緒にショッピングに行った時、一目惚れして買ったものだ。濃いめのピンク色で、甲の部分には大きなリボンがついていて踵の部分が横から見るとハート型になっている。側溝にはまってしまった部分を確認してみたところ、小さなキズはついていたものの踵部分が壊れているということはなく、美晶はホッと胸を撫で下ろした。

「昔は」

やにわに、尚之が言った。

「そういう靴に慣れてない頃、よく躓いてただろ？ それもかなり大胆に。駅の階段から転げ落ちたこともあったよな？」

「あー……うん。あれはかなり恥ずかしかった」

美晶はばつが悪そうに、目を瞬かせ頬をかいて笑った。

尚之はベンチに腰掛けず、美晶の前に立っている。そうして美晶の様子を窺っているようだった。

「しかも雨の日で。ストッキングは破れるし、かばんの中身もぶちまけちゃって。ほんと恥ずかしかったなあ。だけど奇跡的に、尚く

んとの待ち合わせ時間に間に合ったんだよね」

間に合いはしたが、尚之には心配をかけ、その後ちょっと叱られた。

「そういう時は電話するなりメールなりしろ。慌ててまた転んで、大怪我したらどうする？」

美晶はしゅんと肩をすばめたが、尚之が叱るのももつともなことだと、「ごめんなさい、気をつけます」と心底反省したものだ。

似たようなことが、その後も何度もあった。

美晶は決して注意力散漫なタイプではなく、むしろ職場ではきばきと仕事をこなす、しつかり者として通っている。しかし反面、どこか抜けているところがあつて、生傷が絶えない。大怪我こそしたことがないが、擦り傷切り傷、軽い打撲のための青痣をよくつくっていた。

たとえば、自転車のペダルを踏みそこねて危うく転びかけたり、コンビニのドアに激突したり、映画館の座席に座りそこねて尻もちをついたこともあった。

大体が笑いごとで済むからいいものの、それを目の当たりにする率が低く、事後報告される尚之にしてみれば、心配で堪らない。

尚之は、もともとの性格がそうなのか、存外心配性だ。美晶より三つ年上ということもあつて、つい保護者的な目線で美晶を見、構ってしまっていた。「子供扱いして」と美晶をたびたび不平を漏らしていたが、尚之に心配されるのは嫌いではなかった。

今でも尚之のそういう心配性なところは変わっていない。

「まったく美晶は、いつまでたっても目を離せないな」

「……うん」

尚之に呆れ笑いをされ、美晶もまた笑いを返した。

反省はしているのだが、反省するだけでは改善できないらしい。そうしたドジっぷりは、もはや美晶の個性になってしまっている。だからといって、尚之の心配がなくなるわけではないが。

「いいか、何かあつたらまず俺に連絡しろ」

「うん」

美晶は真摯な顔で頷いた。尚之もまた、真面目な顔をして美晶に言い付ける。

「無茶はするなよ？ 痛いなら痛いと言えればいい」

「……う、うん」

「さあ、腕上げる。そろそろ戻るぞ？」

言うなり、尚之は美晶の体を再び抱き上げた。横抱きにしたのは、美晶が丈の短いスカートを履いているからでもある。まさか、“おんぶ”をして両足を広げさせるわけにはいかないだろう。

「うん。尚くん、ありがとう」

美晶が尚之の首に腕を巻きつけたその時、ぽつりと、空から雨粒が降ってきた。

「雨が」と、空を仰いだ美晶の唇を、尚之はほとんど衝動的に、いや、あるいは狙い定めていたのかもしれないが、奪い、こぼれた声と息を吸った。

重ねた唇を離してから、尚之は優しく甘い声で囁いた。

「離すなよ？」

尚之の言葉の意味を察して、美晶は満面の笑顔で応えた。

「うん。うんっ、ずっと離さないからね！」

ゆるゆると降りだした雨は、やがて大粒の雨滴となり、町中を覆い、包み込んでいく。気温は下がらず、相変わらず蒸し暑い。

尚之と美晶の熱烈な想いが、空に伝わったのかもしれない。

夜風

ペルセウス座流星群は、明るい流星が多い三大流星群の一つだといふ。

三大流星群に数えられるのは、一つは一月の「しぶんぎ座流星群」、もう一つは十二月の「ふたご座流星群」、そして八月の「ペルセウス座流星群」だ。

今年のペルセウス座流星群は、月明かりもあるし、天気も曇りがちで、観望条件はあまり芳しくない。

だがどうにか見られそうだと、真夜中、美歩は家を抜け出し、海岸へと向かった。

長袖のパーカーを羽織り、懐中電灯とシートと蚊取り線香、それからペットボトルと携帯電話も忘れず携え、流星群の観察に出かけた。家族には言わずに出てきた。

別段、天体マニアでもない美歩だが、何とはなしに見たくなった。「今夜、たしか流星見られるよな」

と、彼が言ったのがきっかけだった。

同じクラスの、そこそこ親しい男子だ。

むろんその彼にも、流星を見に行くなんて一言も言っていない。

家も近いし、誘えばもしかしたら同行してくれるかもしれないが、あくまで「かもしれない」程度の仲だ。

それに……。

美歩は嘆息し、月明かりの下をとぼとぼと歩いた。

深夜二時、若い娘が一人で出掛ける時間帯ではなかるう。ちよつとアブナイかなとも思ったが、なにぶん田舎町のことだ。海水浴場もここからは遠く、良からぬ連中がたむろしていることもない。よほどの危険はないとふんだ。

松林が見え始めた。月が明るく、懐中電灯はいらないくらいだった。空を見上げると、ところどころに薄雲はかかっていたが、星は良く見える。

「あー、オリオン座だー」

独語しつつ、美歩は松林を抜けて、海岸に近付いた。ザザアツと、波の音がする。聞き慣れた波の音だ。海面は見えなかったが、凪いでいるようだ。

辺りを見回しても他には誰もおらず、波の音と松風の音、それから遠くに流れる車の走行音くらいしか聞こえない。

深夜ということもあり、さほど暑くない。が、空気はやや蒸している。潮風がほんの少しだけ不快だった。

朝昼晩と、どの時間帯でも来たことのある海岸だ。しかし、深夜に一人で来たことはさすがになかったなと、美歩は苦笑した。

手ごろな場所を選んでシートを敷き、そこに腰を下ろした。ペットボトルのキャップを開けてちよつとぬるくなってしまった水を飲んで喉をうるおし、それから美歩はまた大きなため息をついた。

昼間見た光景が脳裏に焼き付いて離れない。

美歩は背を丸め、膝を抱えた。

「……………」

ぎゅつと目を瞑ると、彼の笑顔が瞼の内に浮かんでくる。

楽しげに笑っていた、彼。それは美歩に向けられた笑顔ではなかった。

「流星が見られるな」

その言葉も、美歩に向けられたものではなかった。

彼の横に、見知らぬ女の子がいた。栗色の巻き髪が華やかで、目のぱつちりと大きい可愛い女の子だった。

じっくり見たわけではないが、おそらく同い年くらいだろう。美歩もほっそりとした痩軀だが、彼女もまたずいぶんとスリムで……しかも、美歩と違って胸は大きかった。ショートパンツから伸びる足も白くてキレイだった。じっくりとじっくり見たい気はなかったが、

意に反して、目はしっかりと彼女を観察していた。

かないつこないと、落胆した。

彼に、つきあってる彼女がいるなんて知らなかったけれど、親しそうだった。きつとあの女の子は彼の「彼女」なんだろう。二人並んで歩いているところを偶然目撃してしまった美歩は、夏の日差しではなく、その光景にショックを受け、眩暈すら起こした。

一人で勝手にショックを受けているだけだ。そのことがまた美歩を落ち込ませた。

「あゝあ……」

美歩はごろんと仰向けに寝転がった。

月はもう西方に傾きかけている。夏の星はどこかぼんやりとしていて、光が淡い。流星はなかった。

「失恋、かなあ……」

口にしたものの、けれどどこかでまだ希望を持っている。そんな自分が滑稽だった。

彼から、色良い言葉をかけられたことなんてない。それでも、もしかして好意をもたれているかも……なんて思ったことはあった。少なくとも嫌われてはいない。だから「もしかして」という期待を持っていた。

ざわざわと、松の枝先がそよいだ。

その時だ。背後に人の気配を感じ、美歩は全身をこわばらせ、慌てて上半身を起した。しかし怖くて振り返れない。

砂を蹴ってこちらに近寄ってくる足音が聞こえる。それが次第に速まって、駆けてくるのがわかった。

「井沖いおき!??」

名を呼ばれ、美歩は弾かれるようにして振り返った。

心臓が、まだときどきいつている。

美歩は隣に腰かけた彼……菱矢ひしや尚央なおをぼう然と見やっているが、

それは尚央の方も同じだった。心底驚いているようで、抱えている猫を下におろすのも忘れている。

「そ、それ、菱矢くんちの猫？」

こんなところで、しかも一人でいたいなにやってるんだ、身の危険をちよつとは心配しろよ等、尚央の詰問と説教が一通り終わったところで、美歩はおずおずと話を逸らした。

尚央は、なんだか少し怒っている風だった。怒っているというより、深夜に一人でこんなところにやってきた美歩を案じているのだろう。まったく……と呆れたように呟いて、深々とため息をついた。尚央が抱えているのは、尚央の飼い猫であるらしい。

「すっごい大きいね……。重たくない？」

「めっちゃ重い」

美歩に言われて尚央はようやく猫をおろした。にやあとも鳴かない。ずっしりとしたぶち猫は、美歩と尚央の間でスフィックスのような格好をしている。

「撫でてもいいかな？」

と訊いてすぐ、美歩は左手を丸まってる猫の背に乗せた。それに反応して耳がピンと立ったが、猫パンチがくりだされることはなく、美歩はゆっくりゆっくり、背を撫でやった。

「大人しい子だね」

「そうでもないよ」

尚央は意外そうに目を見開き、それからひどく感心したような声を漏らした。

「こいつ、どっしりしてるけど、けっこう人見知りはげしくてさ。

俺以外に背中なんて撫でさせないぜ？」

「眠くて油断してるのかな？」

「それもあるかもしれないけど、井沖が……」

「わたしが？」

美歩は首を傾げ、尚央の次の句を待った。尚央は頭をぼりぼりとかき、「いや……」と言葉を濁して、その先は言わなかった。

会話が途切れて、少し気まずくなってしまった。

美歩は、それでもめげずに会話を続けた。沈黙が怖くて、口を閉じたままではいらなかった。

「菱矢くんは、猫の散歩に来たの？」

「いや、流星群観ようかと思って。それで、こいつをボディーガードにつれてきた」

「……ボディーガードになるの？」

「不審者が現れたら投げつける」

「それ、ひどくない？　っていうか、投げつけるのも大変そうなんだけど」

「慣れてるからな」

ころころと笑う美歩につられて、尚央も朗らかに笑った。

尚央の笑顔は明るい。人懐っこい気安さがあって、日に焼けた肌と白い歯が爽やかなのだが、月明かりの下ではまた違って見える。なんだかとても……“男の人”に見える。美歩は胸に手を当てた。まだ、動悸がしている。

尚央は背が高く、いつもちょっと猫背気味だ。卓球部に入っているから、自然、前屈みの姿勢になるのだろうか。

美歩は視線をどこに固定してよいやら分からず、主に猫の背を見ていた。分厚くて、枕かクッション代わりに良さそうな大きさだ。

「井沖も星を観に来たんだろ？　流星、見られた？」

「うっん」

実のところ、星なんてちゃんと見てなかった。

尚央のことばかり考えて、流星どころではなかったから。

「今日は月が明るいもんなあ」

尚央はごろりと体を横たえ、腕を頭の後ろに回した。

「せっかく来たんだから観たいもんだけど、どうかな」

「うん……」

美歩も、そつと体を倒した。そして夜空に目をやる。瞬く星座の間に、まだ星は流れない。

暫時、沈黙が二人の間に落ちた。波の音と風の音、そして二人と一匹の息遣いが夜のしじまに流れている。

沈黙を破ったのは、二人同時だった。

「なあ、井沖」

「ねえ、菱矢くん」

声が重なり、二人はぱつと顔を見合わせ、またすぐに逸らした。二人とも、流星を待ちながら、しかし内心はそれどころではなかった。

「な、に？」

どきどきと鳴る胸を押さえつつ美歩が訊くと、尚央は「井沖こそなんだよ？」と訊き返してくる。

目が合った瞬間に言おうとしたことが霧散してしまった美歩は、なんでもないとさえ言えず、少し逡巡してから、つい墓穴を掘るようなことを切り出してしまった。

「今日、ね、昼に菱矢くんのこと、見かけた。女の子と一緒に歩いてたよね？ あ、あの子って、菱矢くんのこと……」

「ああ、あれ、坂口の彼女」

尚央は美歩の語尾を断つて言った。

「坂口くんのこと……彼女？」

坂口というのは、美歩と尚央と同じクラスの男子だ。尚央とはとくに親しい。

美歩は顔を横に向け、ちらりと尚央の様子を窺った。尚央は依然夜空を眺めている。

「うん。坂口んとこ行こうとした途中で会ってさ、それで向かうところも同じだしってんで、一緒に歩いてた」

「そう、なんだ……」

勘違いだった。美歩はホツとしたものの、それでもまだ心に雲がかかっていた。もしかして思わせぶりなことを言ってしまったのかもしれないと、焦ってもいた。そしてその焦りを、尚央に突っこまわしてしまった。

「井沖、あの子のこと、俺の彼女かもって思っで、焦った？」

尚央の問いかけは直球だった。

尚央がこちらに顔を向けた。美歩はとっさに顔を背け、「焦ってなんかないっ」とつい強がり言ってしまった。

でもそれは嘘だと、尚央は気付いただろう。もしかしたら笑われているかもしれないと思うと、さらに気恥ずかしさが増して尚央を見られなかった。

「……俺はさ、すっげー焦ったよ。こんなところに井沖一人でいてさ。なんかあったらどうするんだよって」

尚央の手が下にさがり、二人の間でどっしりと腰を据えているぶち猫の背に置かれた。この季節、猫の毛はずっと触っていたいものではない。手のひらが汗ばんできた。しかしそれは猫を撫でてるせいだけではない。

「ごめん。それは、反省してます」

「だから、今度からは俺を呼べよ？」

「……でも」

彼女でもないのに、こんな夜中に呼びだせない。気軽に誘えないよ……そう返そうとしたが、喉がきゅっとしまつて、声にならなかった。

切なくなつて、泣きそうになった。

尚央はそんな美歩の心の機微を感じとったのか、返事は待たずに語を継いだ。ためらいを押しつけたような、語気の強さがあった。

「好きな子になんかあったら、すげーヤだし」

尚央が言い終えないうちに、美歩は「あっ！」と声を上げた。

ヒュッと、音が鳴ったような気がした。白い筋が流れ、瞬く間に消えた。

「流星だ……」

美歩の独語に、尚央は流されてしまった自分の言葉を惜しみつつも、空に視線を戻した。あいにく、星は連続しては流れなかった。が、しばらくすると、今度は先ほどよりも小さく細い流星があった。

尚央も思わず歓声をあげる。

「見られたな」

「うん、見られたね」

「流れ星って、なんかどきっとするよな、流れる瞬間」

「うん、どきどきするよね」

そうして美歩と尚央は声をひそめてクスクスと笑い合った。胸の鼓動は潮騒のように止まないが、それも心地よさに変わっていった。夜風が松の枝先を揺らして渡る。

ややあってから、美歩は切り出した。頬が紅潮している。

「流れ星に願いを唱えると叶うっていうでしょ？ 流れている間に三回唱えるんだったかな……そんなの無理だけど、でもね、なんだから、……願い叶っちゃったみたい」

尚央は照れくさげに「そっかぁ」と笑い、猫の背を撫でていた手をもう少し先に伸ばして美歩の手を探り当て、そっと握った。

雷鳴

「目を瞑つて」

促され、夕実花は素直に従った。

夕実花の心はとうに決まっていた。この時を待つてもいた。

けれどやはり、いくら大好きな彼とはいえ、すべてをさらけ出してしまふのは恥ずかしくて、怖い。

そんな不安が夕実花の体を戦慄かせていた。

* * *

想い叶って、付き合うことになった彼、駿しゅんのアパートに招き入れられたのは、突然の夕立のせいだ。雨脚は強まり、雷も鳴っている。夕実花は遠慮がちに、けれど「何か」を期待して、駿の部屋に上がった。

初めて足を踏み入れた彼の部屋。

夕実花は部屋中を見回したいのをぐっと堪えて、俯いている。駿が何かを言っても、曖昧な相槌を打つばかりだ。

気もそぞろな夕実花は、雷鳴に耳を塞ぐどころではなくなっていた。

雷はまだ遠く、それよりも窓ガラスを叩きつける雨音が、ひどく耳についた。

夕実花の服も髪も、まだ少し湿っている。それは駿も同様だ。降り出した雨に多少濡れたが、着替えるほどでもない。

駿は夕実花にタオルを貸してやり、自分は髪を濡らしたままでい

る。夕実花のように長い髪ではないから、放っておけば自然に乾くだろう。

「何か飲むか？」

と、駿が問うと、夕実花ははかなげに「うん」と頷いた。

いつも元氣すぎるほどに元氣で陽氣な夕実花だが、すっかりおらしく畏まっている。

雨に打たれて頂垂れている花のようだなと、駿は微笑し、その花の為に甘くて酸っぱいオレンジジュースを出してやった。

コップを両手で包み込むようにして持ち、夕実花は落ち着かなげに駿の顔を窺いながら、ジュースを飲む。嚥下する音と白く細い喉が、やけに眩しい。

駿の口から苦笑まじりのため息がこぼれ出た。

駿は高校の教師だ。そして夕実花は、元教え子。教え子、といっても、夕実花のクラス担任だったことはなく、夕実花が所属していた天文部の顧問だった。

夕実花に“告白”されたのは、夕実花が高二の時。バレンタインデーに、本命だと言ってチョコを差し出された。

当時、駿は夕実花のことを「元氣で可愛い女の子だ」と思っていたが、それはあくまで教え子に対しての評価であり、恋愛の対象外で、そもそもそういった目で生徒を見てはならないと自戒し、弁えていた。

だから夕実花に差し出されたチョコも、礼だけを言って、受け取らなかった。

本命だといったところで、夕実花が本気だとも思っていなかった。たんに、若い独身男の教師にミ〜ハーな気分で憧れているだけだろう。その漠然とした感情を、恋だと錯覚しているに違いない。女子高生らしい、夢見がちで独りよがりな恋愛ごっこなのだろうと。

しかし夕実花はどこまでも本気だった。たしかに最初は駿が思っ

ていたように、漠然とした懂れだった。上背もあるし、容貌も整っている。厳しいところもあったが気安げな性質だったから、生徒たちの間でも駿の評判は「けっこういい先生だよね」と概ね好評だった。

夕実花は一年の頃から天文部の顧問だった駿と少なからず関わりを持っていたが、意識しだしたのは、二年になり、天文部の部長になってからだ。話す機会が自然と増え、そうして月日を過ごすうちに、夕実花の心はもはや変えようもなく、決まってしまった。バレンタインのチョコを受け取ってもらえなかったからといって、それであっさりあきらめられるほど簡単な想いではなくなっていた。

夕実花は、駿が呆れ、途惑うほどの積極さとひたむきさで、想いを体当たりにつづけてきた。怒られることもあった。泣かれることもあった。とまどう駿に、困ったような微笑を向けてくることもあった。申し訳なさそうな顔をし、しばらく距離を置かれたこともあった。

だが、夕実花は決して前言を撤回しなかった。「好き」という自分の気持ちを否定しなかった。

夕実花は一途すぎるほどに、駿をまっすぐに見つめ続けていた。夕実花の瞳に映っているのは、教師としての駿でなく、ただ一人の男としての、駿だ。

駿の気持ちは、次第に傾いていった。ほだされやすい性格ではなかったはずだが、夕実花の純粋で真正直な恋心にはほだされずにはいられなかった。

結局、夕実花の想いを受け止めたのは、夕実花が卒業してからだった。

「好きなんです！ 先生の彼女にしてください」という何度目かの告白に、駿は「物好きだな」と苦笑して応えた。

「物好きなのは、いけませんか？」

「いや？ いけなくはないさ。人それぞれってやつだからな」

「わたしが好きなのは先生です」

夕実花は繰り返した。大事なことから念を押すように。
根負けしたといった体で、駿は自分の気持ちを認め、それを夕実花に伝えた。

「俺も、どうやら好きになったようだ。夕実花のこと」

「はっ、はいっ！」

夕実花は満面の笑みを浮かべ、目を輝かせて言った。

「先生、これからわたしにいろんなこと教えてください。わたし、先生から教わりたいたことがいっぱいあるんです！ 先生のこと、もっともつと知りたいんです！」

* * *

夕実花は、駿にとって意外性のかたまりのような存在だ。

意外なことに、駿は夕実花にとって初めて付き合う男性だった。

初恋の経験はある。告白されたこともある。だが、縁がなかったのか、付き合うには至らず、恋は終わった。

美少女というほどの容貌ではないが、十人並みと評される程度の容姿でもなく、全体的に均整のとれた、そこそこに可愛い外見の夕実花だ。モテないこともないだろうにと、駿は口にこそしないが、つい不思議そうに夕実花を見てしまう。

その夕実花も、今では女子大生だ。ほんの数ヶ月前まで女子高校生で、セーラー服姿のイメージがまだ抜けきっていないものの、ふと大人びた顔をするようになった。

そうはいってもまだまだ幼い。夕実花の初々しさは、駿の頬と心を緩ませてしまう。

両の手のひらでぎゅっと包み込んで小さく握り、ぱくりと食べてしまいたいほどの可愛さだ。

雨に髪を濡らし、緊張した面持ちで駿を見つめている夕実花の愛らしさは、いったいどうしたものか。

駿は辛うじて理性的な態度を崩さずにいるが、それも時間の問題だ。

夕実花を部屋に上げてしまったことを、駿は少しだけ後悔していた。

夕実花は、意外なことを言う。それもなんの脈絡もなしに、だ。

夕実花は恨めしげな目を駿に向けて、唐突に言った。

「先生、わたしのこと、ちゃんと……好きですか？」

「なんだ、いきなり？」

駿は面喰ったように、床に座っている夕実花を振り返り見た。夕実花の顔は真剣だ。じっと、駿を見つめている。そして意を決したかのように、言った。

「わたし、……魅力ありませんか？」

「……………」

駿は思わず眉をひそめた。

夕実花が何を言わんとしているのか、それが分からないほど愚鈍ではない。分かるからこそ、駿は沈黙して応えなかった。

夕実花はまだ半分以上残ったオレンジジュースをテーブルに置いた。切なげなまなざしを、一心に駿に注ぐ。

「わたし、先生のこと知りたい。教えてほしいんです。……わたし、どうやってたってもっと先生に近付けるの？」

「夕実花」

駿は夕実花の前に片膝をついた。ややためらい、そっと手を伸ばす。その手を拒むように、夕実花は顔を背けた。

夕実花の茶色みを帯びた少し癖のある髪から、仄かに甘い香りがする。雨に濡れたせいだろう。その香りに、駿は軽い目眩を覚えた。白いうなじも濡れた髪も、すばめている華奢な肩も、どれほど駿の心を惑わせ、乱しているのか、当の本人はまるで気が付いていない。それどころか、

「いつも子供扱いして」

と、夕実花は傷つけられたような顔をし、駿を責めるのだ。やれやれとため息をつきたいのを駿は堪えていた。夕実花こそ駿を「いつも大人扱いして」いるのではないかと反駁したくなる。夕実花が思っているほど、自分は大人ではない。

「先生を困らせることばかり言つて、こういうところが子供なんだつて、分かってます。けどわたし、先生のことが好きで。好きで、どうしたらいいのか分からないんです。だから……」

「夕実花」

駿は低い声で夕実花の嘆きを遮った。

「夕実花、目を瞑って」

「え……」

「瞑って」

「……………」

夕実花は泣きだしそうになっていた目を大きく睜らせ、駿を見つめ返した。そして顎を引き、こわこわと目を閉じた。

臉を落とし、視界から駿の姿を消す。ぎゅつと眉間に力をこめ、肩を竦ませた。胸の前で両手を組み、高鳴る鼓動を隠そうとした。

夕実花の手は緊張のあまり小刻みに震えている。

「……そう緊張されると、やりにくいな」

駿は夕実花の顎を指先に乗せ、上向けた。だが、そのままでは止まってしまうっている。

「……………」

夕実花は夕実花で、もうどうしたらいいのか分からない。じっとして、駿の次の行動を待つしかないといった体でいる。

一瞬の沈黙。苦しくも甘い、そして熱のこもった沈黙は、しかし突然の閃光とその直後の雷鳴によって打ち破られた。

「きやあぁっ！」

天が割れたかのような激しい雷鳴に、夕実花は耳を塞ぎ、体を縮

こまらせた。

続けて、雷は鳴る。今度はどこか近くに落ちたようだ。ビリビリツと窓ガラスが揺れた。空間が、続けざまの雷鳴に振動している。

夕実花は半泣きになり、雷に怯えていた。

「夕実花」

駿は震える夕実花を包み込むようにして、抱きしめた。宥めるように髪や背を撫ぜる。

「怖がりだな、夕実花は。大丈夫、すぐ雨も雷もやむよ」

「……せ、んせ……」

「そうしたら、家まで送ってく」

「……」

「それまで、このまま……もう少し辛抱しててくれ」

「先生……」

きゅつと、夕実花は駿の胸元を握る。その手はまだ震えていた。

「先生、わたし、まだ目を瞑ってます。……いつまでこうしてればいいんですか？」

声も、少し震えている。

駿は体を僅かに離し、言われたまま目を瞑っている夕実花の顔を見た。まなじりが湿っている。

「いつまで……」

「いつまで」

夕実花の声に、駿は同じ言葉で声を重ねた。

そして駿は再び夕実花の顎をつまんで持ち上げた。夕実花ははつとして、つい目を開けてしまった。

駿の切なげで強いまなざしとぶつかった。

「いつまで、夕実花は俺のことを先生って呼ぶんだ？ いつまでたっても先生でしかないのか？」

「あ……」

夕実花は声を詰まらせた。

雷はまだやまない。ただ、少しずつ遠ざかりつつあるようだった。

「あ、あの、わたし、ご……」

「ごめんなさいという言葉は、声にならなかった。駿に唇を塞がれ、突然のことに息をつめてしまった。」

駿は一度唇を離すと、今度は角度を変え、より深く激しく口づけた。夕実花は蕩心したように瞼を閉じた。まなじりに溜まっていた涙が流れ落ちる。やがて息が苦しくなつて、「んんっ」と抗議の声を上げ、それedyou駿は唇を解放してくれた。

「子供扱いしてたわけじゃない」

「う、ん……」

「子供だと思つてたら、こんなことしない」

「うん」

駿は恥ずかしげに俯いた夕実花を抱き寄せた。

「ただ、少し怖かった。いつまでも先生ぶつて、そうしてセーブしてた」

「……………」

夕実花は駿の背に腕をまわし、抱きつき返す。

胸が熱い。夕実花は嬉しくて、また泣きそうになつてしまった。

ふざけて抱きついたことは今までに何度かあった。だが、こんなに近く、心まで抱きしめているような抱擁はなかった。

「怖かったのはわたしだけじゃないんだ」

「当たり前だ。卒業したとはいえ教え子に手を出したんだからな。」

それに九歳の年の差つてのは、けっこう不安なもんなんだ。子供とかそういうのじゃなくて」

「え、あれ？ 十歳じゃなかった、年の差？」

訊き返され、駿は少しむっとしたように、体を離して、夕実花を睨みつけた。

「九歳。夕実花が来年二十歳になつた時、俺は二十九」

「わたし、勘違いしてた。十歳差だと思つてたから、先生、来年はもう三十なんだなあって」

「来年もまだ二十代ですから」

ムキになって二十代を強調する駿に、夕実花は可笑しくてたまらず、ぷつと噴き、笑いだした。そういえば「先生」は、そういうちよつと子供じみたところがあって、可愛いなあって親近感を抱いたんだっけ。

さっきまで鬱屈して萎んでいた夕実花だが、すっかり気分をよくしたらしい。

駿に手を取られ立ちあがると、明るく笑って「ありがとう、先生」と律儀に礼を言った。そんな夕実花に、駿は「それで」と切り返す。

「それで夕実花は、いつになったら俺のことを名前で呼ぶんだ？」

「あ。えつと、それは……」

「まあ、先生と呼ばれるのも背徳的な感じがして悪くはないんだが」

「ええつと、そ、そのうちには……っ」

「そのうち、ねえ？」

駿はくつと喉を鳴らして笑う。

今度は夕実花がムキになり、「ほんとですからっ！」と声高に宣言した。

ふと窓の外を見ると、もう雨はやんでいた。雷鳴は遠くで轟いているが、雨雲は風に流され、やがて聞こえなくなるだろう。雲の切れ間から幾筋もの陽光がこぼれ、街路樹の枝から降り落ちる雫がその光を反射し、日暮れ時を鮮やかに彩っていた。

駿と夕実花は手を握り合ったまま、おもてへと出る。

少々蒸し暑いが、雨上がりの風は気持ちがいい。二人は顔を見合わせて笑った。

奇矯

彼にはいつも驚かされ、戸惑わされる。

今朝も相変わらずで、彼は布団を乱暴に引っぺがし、寝起きの悪い私の鼻を軽くつまんで目覚めを促した。

「花乃^{かの}、支度しろ。出かけるぞ。それともここに一人で置いて行かれないか」

悠^{ハル}くん^{ハル}にせつつかれ、私は大急ぎで身支度を整えた。彼はどこに行くかなんて一言も言わず、私の手を引っ張って目的地へと連れていく。私の手を掴む彼の右手は力強く、逆らえない。

いつも、そう。

強引な悠くんは、私の意思を確認するのはいつだって後回し。：というり、私の意思を先回りするように読んで、行動を決めてしまう。

昨夜だってそうだった。

彼のアパートになし崩し的に泊まりしちゃうのは、これで何度目だろう。

帰ろうかな。でもやっぱりもうちょっと悠くんと一緒にいたいな。だけど今週は彼のトコにお泊まりしちゃうことが多かったから、今夜は帰った方がいいのかな……。

そんな風に一人悶々と逡巡している私の心をあっさり見透かして、悠くんは強引に私を引き止める。言葉ではなく、行動で。そうして、彼の腕にとらわれたまま朝を迎えるのだ。今朝のように。

* * *

朝、彼に連れて行かれたのは映画館だった。何を観るのかと訊く

間もなく、彼はさつさとチケットを買って私の手を引いて館内に入っていく。

悠くんの強引さには慣れていたし、寝起きでぼんやりしてたから、私は文句も言わず諾々と彼に従った。

ただ、ちよつと意外だった。

彼が買ったチケットは、私がちよつと前に観たいかもって呟いた恋愛映画だったから。

彼はアクション系とかミステリー系の映画を好んで、恋愛ものなんてほとんど観ない。私が観たいって言っても付き合ってたつきあってくれなかった。

それが、今日はどうして？　　こういう風の吹きまわしなんだろう……？

不思議に思いながら悠くんの顔を窺い見ると、彼は何か考え込むように眉をしかめていた。けれど不機嫌な風じゃなかった。

私の視線に気づいて「何だよ、その間の抜けたような顔は？」と返してくるくらいだから。

「間の抜けた顔させるのは誰ですか、悠くん？」

私が拗ねた口調で言い返すと、悠くんは満足げに笑う。そしてむくれる子供をなだめるように、私のゆるい癖のある髪をくしゃくしゃと撫でつけてくる。こんな時、彼の鋭く切れ長の目は優しくなごやかになる。彼の、不意にやわらぐ表情が、私の心をもやわらげてくれる。

「おまえは、そういう顔がやたらに可愛いな」

「……っ」

唐突におだてられ、私は思わず絶句してしまう。

頬が赤くなってるのが自分でも分かる。初な女の子に戻ったみたいで、自分で自分の反応が恥ずかしいっただらない。

悠くんはと言うと、可笑しげに笑っていたかと思うと、また、ふと物憂げなため息をつき、そして私から視線を外してしまった。それはほんの一瞬のことで、不安感を募らせるには至らなかった。た

だっしだけ氣にかかった。

映画が始まってすぐ、うつらうつらと寝入ってしまった私を、悠くんはからかうように「睡眠不足は俺のせいかなんて言って笑う。そういうことさ」と言わないようにって、私の肩を抱く悠くんの手をぺちりと叩いてやった。

懲りない悠くんは、「そういうことってのは、どういうことだ?」って切り返してくる。

「具体的に言ってみるよ」

「だから! やらしーこと言わないでってこと!」

「やさしいことって、どんなことだよ? ん? 具体的に説明してもらわないと分からないな」

「もおっ、悠くんっ! いい歳して子供っぽく絡まないでよ!」

「おまえも、いい歳して子供っぽく拗ねるなよ」

「もおっ!」

私達の、こういう他愛無いやりとりは傍から見てももしかして「バカップル」的なはしゃぎようなものかもしれない。

だけど、悠くんの冷厳そうな見た目がバカップルのな度合いをちょっただけ下げてくれてるかもしれない。悠くんはオーバーなリアクションもしないし、声も昂らせない。私が一方的に喚きたててる……喚かせる原因は悠くんにあるんだけれども。

私より二つ年上の悠くんは、細面で鼻梁も高く、端正な容貌をしていて、ちよつと近寄りがたい雰囲気がある。一重瞼で切れ長の眼は鋭く、声の調子も低くてずしりとした重みがあつて、それらが凜とし、厳然としたイメージを作っているのかも。実際悠くんは居丈高なところがあつて、話し方も威圧的だったり命令口調だったりすることが多い。

「俺様」な男と言えなくもないけれど。

それほどには、悠くんは「俺様」な性格じゃない。

だって、おまえが観たいと言ったから連れてきてやったのに寝こけてるっていうのはどういうワケだ、っていう風に、私を責めたりはしないもの。

意地悪なんだか優しいんだか分からなくなる彼だけど……、結局のところ彼は甘いんじゃないかなあと思ってる。強引だけど大らかで。でもそれは、もしかすると私限定なんじゃないかなあ……なんて、ちょっと自惚れてる。

寝ていてほとんど観てなかった映画だけど、ラストだけはちゃんと観た。ハッピーエンドの恋愛もので、ラストは観ているこちらが照れくさくなるようなものだった。花束渡してプロポーズっていうシチュエーションは、ありがちだけど、やっぱりいいなあって思ってしまう。

今年二十四になったばかりの私。そんなシチュエーションに憧れるのもどうかと思うけど、乙女心に年齢は関係ないし！

でも、恥ずかしくって、さすがにそんなことは悠くんには言えない。言ったらきつと笑うだろうから……。

一方、横に座ってる彼は、腕組をし、気難しそうに眉根を寄せてエンドロールの流れるスクリーンを見ていた。

……なんだろう？ 今日の悠くんはいつもと雰囲気が違う。不機嫌なのとも違う。疲れているようでもなく、ただなんとなく妙に落ち着かなげだ。

悠くんがまどっているその奇妙な雰囲気は、なぜだか私の心の奥をくすぐってきて、不思議な気分にした。

* * *

映画館を出た後、ランチにはまだ早いからと、街を散策することにした。

映画館からほど近いところに、一応観光スポットらしい古い街並みがある。観光地といってもさほど有名じゃないから、歩いているのもたぶん八割は地元民だと思う。

お茶も飲める和菓子屋や地酒を豊富に扱ってるらしい酒屋、和布や古布の展示即売をしている織物店や製作体験のできるガラス工房、色とりどりのバラの花で飾られた洒落た花屋に整頓されてなさそうでされてるかもしれない古本屋なんか軒を連ねている。気持ちいい秋晴れの日で、そぞろ歩きにはうってつけだ。

「ね、さっきの花屋さん、バラの専門店みたいだったね、バラだけできれいだったなあ」

「そうだったか？」

悠くんはどこか上の空で、適当な相槌を返してくる。

「この季節は花持ちもいいし、帰りに買っていいのかな？ あと和菓子屋さんにも寄りたいかも！ この季節は何と言っても栗きんとんだし！」

「分かりやすく花より団子だな、花乃は」

「違うよ。花も団子も、どっちも好きだもんね」

「ああ、そうだな、花乃は」

さり気なく小馬鹿にされた気がしなくてもないけど、いつものことだし、気にしない。悠くんの呆れたような笑い顔が好きってこともあるけれど。

「私、ここの街並みって好きだな。久しぶり来れて嬉しいよ」

はしゃぐ私の一歩後ろで、悠くんは周囲を軽く見まわして苦々しそうにため息をついた。

「思ったより人通りが多いな。まあ、土曜だし、観光地的には賑わってないと思うだろうが」

「来週は秋祭りがあるらしいから、その日はもっと混雑するんじゃないかな？」

「……ああ」

壁や電信柱に貼られたポスターを見、悠くんは「もうそんな季節

か」と呟き、その後何か考え込むように顎を撫でた。

それから悠くんは不意に足を止め、私の手を掴んだ。そしてすぐそばにある神社を指さして、唐突に言った。

「その神社の、銀杏の下のベンチで座って待ってる」

「え？」

「いいから、待ってる」

「う、うん」

あまりに唐突で戸惑ったけれど、悠くんが強引なのは相変わらずでいつものことだから逆らったりせず、悠くんが促すままにベンチに腰を下ろした。

「そこを動くなよ？　なるべく早く戻るから、とにかくじっと待ってる。……いいな？」

「……………」

私はちよつと肩をすくめて、こつくりと頷いた。

いったいどのくらい、ここでこうしていただろう。

銀杏の葉がはらはらと風に流され、散り落ちる。手持無沙汰だった私はベンチの上に落ちた銀杏の葉を手にとって落とし、また別の葉を拾って、手放した。

風が出てきたけど、日当たりのいい場所だから寒くはない。中天にかかっている日が眩しいくらいだ。

悠くんはまだ戻らないのかなあと考えてる頭の別のところで、そろそろお腹空いちやっとなあ、お昼は何を食べようかな、悠くんは何食べたいのかなあ……って、ぼんやり考えていた。そうしているうちに悠くんは戻ってきた。

さっきまで手ぶらだったはずなのに、足早に私のもとへ来た悠くんの手にはなんと白バラの花束が握られていた。

「……悠くん？」

私は小首を傾げ、悠くんの様子を窺った。悠くんはむつつりと黙

りこみ、眉間に深々と皺を寄せてる。けれど怒ってる風ではなくて、……なんだろう、緊張してる……ような？

「花乃は、バラなら白が好きだって言ってたな？」

問われて、私は目を瞬かせた。

「う、うん、それは、……うん、好きだけど……」

私が、白バラが好きだからって、わざわざ買ってきてくれたのかな？ そういえばさっきの映画、ラストシーンで男の人が恋人に渡してた花束は赤バラだった。両腕にいっぱいバラを、愛の告白とともに押しつけるようにして渡してたっけ。

私、そんな物欲しそうな顔してスクリーンを見てたのかな？ ……

…そんな気がしないでもないけれど。

「花乃」

「……？」

戸惑いがちに、悠くんが私の名を呼ぶ。そして、沈黙が落ちる。

悠くんは座ったままの私の前で眉をひそめて佇んでいる。花束を私に渡すことなく、中途半端な位置で白バラを私に向けていた。

私はじつと悠くんを見つめ返し、次の言葉を待った。やがて悠くんは意を決したように言葉を継いだ。

それは、いつもの悠くんらしくない少しぎこちない声音だった。

「花乃、……俺と、結婚してほしい」

「……え……？」

思いもかけない悠くんの告白に、私は息を詰めた。

今、悠くん、なんて言った？

訊き返したかったけれど、訊き返さなかった。悠くんの告白はちゃんと耳に届いていたから。それにきつと、二度は言ってくれない。悠くんはそういう人だ。いつもの彼からは想像しがたいけれど、本当はとも照れ屋なんだってこと、私はちゃんと知ってる。

そう、……そういう人なんだ、悠くんは。

強引で、命令口調で、独断的で、私をぐいぐい引っ張って前を歩いて行く人だけれど、私を無視したりはしない。私の意思をちゃん

と尊重してくれる。

もしかして悠くんはずっと考えてたのかな？ プロポーズしようって、映画を見ている間中？ 映画に行くぞって誘った朝から？ それとももつと前から私との未来を考えてくれたのかな？

今日悠くんが気難しげな顔をしていた理由が分かって、私は体が熱くなるくらいに嬉しかった。

悠くんが持つてる白バラの花束は、両腕で抱えるほどではなくて見たところ二、三十本くらいだ。しかもほとんどが蕾の状態で、ラッピングはされてるものの、いささか地味な花束だ。けれど、悠くんが持っているからか、ものすごく貴重なものに見える。なんてきれいな白バラなんだろう。

私は立ち上がり、悠くんからバラの花束を受け取り、そして彼の右手を握った。悠くんの手は熱く、ほんの少し汗ばんでいた。

いつだって迷いなく事を決める悠くんだけど、肝心な場面で弱気になったりもする。でも引き気味にはならず、押さえるところはちゃんと押さえて、そうして私に決定権を委ねてくる。たとえば、今みたいに。

「悠くん、バラ、ありがとう」

「あ、……ああ」

いつも強気な彼の、不意に見せられる弱気な一面が好き。

もしかしたら計算かも……って思うと癪だけど、それだってたぶんお互いさまだから。

私はにっこりと強気な笑顔を見せ、彼が待っているだろう応えを口にした。上目遣いに悠くんを見つめ、そして普段の彼らしい命令口調をちよつとだけ真似て。

「悠くん、私と結婚して。この手をずっと離さないで」

「ああ」

悠くんは安堵したように笑い、私の手を強く握り返してきた。

「前言撤回はなしだからね？」

「分かってる。花乃こそな？」

「うん、悠くんもね」

私達は緊張を解きほぐし、笑い合った。

私は悠くんの手を握ったまま歩きだし、悠くんは私に歩調を合わせてついてきた。

悠くんの右手は熱くて、その熱が指先を通して私の全身に伝わってくる。幸せな気持ちがいんと痺れるような痛痒感を伴って、のぼせ上がってきた。

幸福感に満たされて、ふわふわと心が浮遊してる。嬉しくて、頬は緩みっぱなしだ。

悠くんも同じ気持ちでいるといいな。

そんなことを思ってる私の顔を覗き込んで、悠くんは不敵に笑った。

「花乃、おまえ、顔真っ赤」

「……っ」

悠くんにはいつも驚かされる。だけど、それよりももっといっぱいに、私を嬉しがらせ、喜ばせてくれる。

いつもの余裕を取り戻した悠くんが、ちょっぴりこにくたらしかったりもするのだけど。

呪術 魔法使いになりたい！

どこをどう辿ってきたものか。

何の前触れもなく、その娘は魔術師の前に現れた。

あわただしくノックされ、返事を待たずに扉は開いた。一切の迷い、戸惑いといったものが感じられない、豪快な開け方だ。鍵の存在など、考えもしないのだろう。

娘は扉を押し開けるや、開口一番、言い放った。

「わたしを弟子にしてくださいっ！」

何の前置きもない。

まったくもって唐突な申し出だった。

* * *

古めかしい布張りの椅子に足を組んで座り、黙然と分厚い本に目を落としていた男は、突然の闖入者に驚く気配もなく、一瞥しただけで、すぐに視線を元に戻した。

椅子の背もたれにとまっていた一羽のクラスだけが首をめぐらせ、開け放たれた扉の方に目を向け、羽をぶるつとふるわせた。しかし一鳴きもせず、男同様にすぐに突然の来訪者から目を逸らし、沈黙を保った。

「ちよっ！ なんですか、ノーリアクションですか！ 突然なんだとかおまえは誰だとかどうしてここが分かったのかとか、そういうツッコミも一切なしですか？」

男のもとに飛び込んできた娘は、現れ方がそうだったように、実に気忙しい。男の無反応さを攻め立てたかと思うとハタと気付いたように、「あっ、そうか」と声を上げると、大きな目をさらに大きく見開いて、首を左右に振って周りを確かめた。娘の長い髪が軽やかに揺れる。

「もしかして今日の前にいるのは人形か何かで、本物は別室からわたしを覗き見て、弟子にするのに相応しいかどうかチェック中？ そっか、なるほど、そのカラスですね？ そのカラスの目を通じて観察してるですねっ？」

娘はズバズバと踏み込んでくる。近づいてくる娘に対し、カラスは身を低くして構えた。カツと威嚇の声を上げたが、娘はへこたれない。それどころか、

「えーっと、こんにちは。んと、もしかしてここは夜の時間？ だとしたらこんばんは」

などと、友好的な笑顔を向けて話しかけてくる。

「カラスって強面かと思ってたけど、よく見るとけっこう……やっぱ怖いけど、かわいい……かも？」

度胸があるとも言えるが、単に図々しいだけかもしれない。実際、娘は初対面の挨拶すらせず、いきなり自分の用件を男にぶつけてきた。が、今はその用件から、話は逸れまくっている。

「ペット、じゃないですよねえ？ えーっと、眷属とか使い魔とか、そんな感じですか、このカラスさん？」

娘は呑気にカラスに話しかけながらも、やはり人間を相手に喋りたいのか、椅子に座ったまま身じろぎもしない男に何度か視線を流した。

男は、娘の見るところ、三十歳になるかならないかといったところだ。もつと若いかもしれないが、逆に百歳だと言われても信じられる気がした。いかにも隠遁者といった風情で、身なりは整っているが地味に落ち着きすぎ、どうにも古めかしい感じがする。

無愛想で寡黙なもの、男の生業を考えれば、納得できる。謎めいて神秘的と言えなくもない。

（うん、いい感じかも！）

娘は口元をほころばせた。想像力が豊かな娘は、男の外見だけでいろいろと妄想を膨らませることができるようだ。果ては、「これこそ運命の出逢い！」と結論付けるに至る。

「運命の出逢い」の相手に認定された男は、好奇に輝く娘の視線を冷やかにはね返していた。

娘はちよつと小首を傾げ、本に視線を落としたままの男を改めて観察した。

呼吸はしているようだし、瞬きもしている。ビスク・ドールのように肌のきめは細かく美しい。

人形だとしたらものすごく精巧にできた人形で、本物もきつとこれにそっくりなんだろうかと憶測した。

髪には霊（魔）力があると娘は信じている。だから男の青みの強い鉛色の長髪を見、やっぱり髪は長い方がいいんだと、勝手に得心したりもした。

娘はとにもかくにも感激している。万歳三唱して、人形だろうと石像だろうと、目の前にいる男に抱きつきたいほどの喜びようだ。

おそらく、男がそのまま無視を決め込んでいたなら、娘は恥じらいもなく飛びついていたかもしれない。

「……………」

男は無視し続けるつもりだったが、無視し続けたところでこの場に静寂が戻る見込みはない。招かれざる訪問者を手取り早く追いつ返すには、来訪の無駄を悟らせるしかない。

嘆息し、男はようやく声を発した。この時初めて、男の灰青色の双眸が娘を映した。

「弟子はとらない。帰れ」
にべもない。

男は冷然と言い放ち、再び灰青色の視線を本に落とした。ぱらりとページを繰って、娘の存在をも流そうとした。

もちろん、娘は納得しない。納得するつもりもない。男が頷くまで居座る気である。

「帰りません！ やつと見つけた本物なんだもん！ 何がなんでも弟子になります。なるといったらなるんです！」

「……………」

男はため息をつき、眉をしかめた。淡白な反応だ。その男のすぐ傍で、黒羽のクラスは羽繕いを始めている。

「念願かなってやっとここに辿りつけたんだから、簡単に引きさがったりしません！」

「……………」

どうやってここに辿りつけたのか、それだけは男としても若干興味はあった。“隠の術”を施してある男の居所を、いったいどうしてこの娘は見つけられたのか。あまつさえ、固く閉ざされていたはずの扉を易々と開けて、男のテリトリーに踏み込んでくるとは。

不思議ではあった。

だが娘に問いかければ、関わりが深くなる。それは避けたかった。面倒事を嫌う男は頑なに口を噤んでいるしかない。しかし男の前に現れた“面倒事”は、なおも交渉を深めてくる。

娘は声の調子を少し落としてしおらしく言った。

「お願いします。わたしを弟子にしてください」

殊勝にも、娘はぺこりと頭を下げた。その所作はひどく子供っぽく、愛嬌がある。

「……………」

「…………… お願いします」

どうやら目の前にいる男は、石像でも人形でもない、生身の存在であるらしい。娘が求め続けてきた、「本物の魔法使い」だ。異空間に居を構えている、異世界の魔法使い。まさか本当に出逢える日がくるとは……！

ここで引き下がるわけにはいかない。チャンスは掴んだら何があるんでも離さない、というのが彼女の（今決めた）モットーだ。

「子供の頃からの夢なんです。わたし、魔法使いになりたいんです」「勝手になればいいだろう」

反応するだけマシといった、男の態度と言葉だ。しかし娘はめげない。

「自分ひとりの力でなれるなら、とっくになつてます。だけどどう

やったら本物の魔法使いになれるか分からなくて、困ってたんです。才能は、たぶん……あると思うんですよ。ほらだって、こうしてここを見つけれましたし！」

「……………」

なるほど、娘にそれなりの天賦の才はありそうだった。

男は何度目かのため息をつき、本を閉じた。

「私は、言の葉を操る魔術師だ」

「はい？」

「呪文と言えば分かるか」

ぶつきらばうな言いようは変わらないが、男が語りだしてくれたことに娘は素直に喜色を浮かべた。

「呪文ってあれですね。アブラカタブラとかエロインエッサムとか！」

「アブラカタブラ、エロインエッサムだ」

男は苦虫を噛みつぶしたような顔で訂正した。

「そうとも言いますね」

娘は悪びれずに笑う。

「そういう呪文を使う魔法使いなんですね！」

「魔術師だ」

またしても男は訂正した。

娘はちよつと呆れたように、「はあ、そうですか」と返した。

大して違わないじゃないかと思っても、さすがにそれは口にしない。言の葉を操る「魔術師」なのだから、言葉一つ一つにこだわりがあるのかもしれない。偏屈なのも魔法使いらしくていいかも、なんて思ったりもした。

「呪文っていえば、わたし、暗唱できる呪文があります！」

娘は自慢げに言い、記憶力だけはいいからと笑って付け足した。

「般若心経です！ あれは、なんか発音が軽快で言いやすいんですよ！ って、般若心経って知ってます？」

「知っている」

男はそつけなく答え、娘は感心しきつた様子で、「ですよーっ」と返してきた。男はなんとなく小馬鹿にされたような気分になり、娘に話しかけてしまったことを心底後悔した。

しかしもう後戻りはできないとも悟った。

男の傍で、カラスが低く鳴いた。笑っているようでもあった。

そのカラスにつられて、というわけでもないだろうが、娘は瞳を輝かせ、自分の幸運さを満面の笑顔で示している。

「わたし、ほんともうつ、なんてラッキーなんだろう!? 呪文を操る魔法使いに出逢えたなんて、やっぱりこれはもう運命としか言いようがないですよー! だってわたし、シンデレラに出てくるような魔法使いになりたいって思ってるんですから! ビビデバビデとかって魔法の呪文となえるのが夢で。それにああいう、ちよつとこつ……中途半端な魔法をかける魔法使いになりたいっていうか!」

「中途半端?」

男は怪訝そうな顔をし、つい訊き返してしまった。

「全部を魔法に頼らせるんじゃないくて、最終的には自分の力で道を切り開いていけるような魔法がいいんです。そういう風な魔法をかけられる魔法使いになりたいって、ずっとずっと願ってきたんです」

「……………」

「もちろん、箒に乗って空を飛んでみたり魔女っこに変身してみたり魔物を召喚してみたりもしたいですけども!」

「……空を飛ぶのも変身するのも、不可能だ」

「魔物召喚はオツケーなんですネっ!」

「……………」

男の眉間には深々とした皺が刻まれて、たわむことがない。どうにも分が悪い。

男は、自分が押され気味で、さらに押し返すのが難しそうだとも察している。

だいたい、扉が開いたこと自体が、異常なのだ。異常事態の発生そのものが少なく、そのせいで対処に出遅れてしまったのは男の

ミスだ。

男はにがりきつて嘆息し、それから背後にいるカラスに何か小声で指示を出した。

カラスは一鳴きするとサツと翼を広げて飛び立ち、またすぐに元の場所に戻ってきた。嘴に、紙をくわえている。男はそれを手に取った。

「私に弟子入りしたいとのことだが」

「はい、そうです！」

「先ほども言ったが、私はヒトが使う言葉を研究し続け、言葉の魔術を用いる」

「はいっ」

娘は元気よく応える。もう弟子入りできたような顔だ。

「弟子入りしたいというからには、言の葉を正確に発音してもらわねばならない」

「は、はいっ」

「……では」

弟子入り志願をしてきた娘に、男は入門試験を行うことにした。

実に簡単な試験だ。

男はカラスがくわえてきた紙を娘に向け、「これを読んでみる」

と言う。言葉の魔術を学ぶ上で欠かせない重要な単語だ。一息で言いきれ、と。

娘は固唾を吞んでから頷き、意気込んで声を発した。

「じゅ、じゅじゅちゅっ」

紙に書かされていた単語は一つ。二文字の漢字、『呪術』。

男は笑いもせず、

「入門は許可できんな」

用意していた言葉を口にした。

もちろん、娘は納得しなかった。それどころかリベンジすべく闘志を燃やしている。

「そのくらい、すんなり言えるようになってみせますから！」

入門の許可は得られなかったが、男のもとへは出入り自由になった。自由にさせたつもりは毛頭なかったが、娘は何食わぬ顔でやってきて平然と居座るようになっていた。それどころか男の身の回りの世話まで焼くようになり、すっかり弟子気分でいる。

今日も娘はやってきて、意味不明の「呪文」をつつかえながら唱え続けている。

「ナマムギナマゴメナマナマコッ！」

そして有耶無耶のうちに娘の師匠になってしまったらしい魔術師は、娘の淹れた茶を飲みながら本のページを繰り、時折ため息をついては内心で訂正している。

「……ナマタマゴ、だ」

占術

魔法使いになりたい！

（前書き）

「呪術」のその後の小話です

占術 魔法使いになりたい！

「師匠は占いつてやらないんですか？」

押しかけ弟子の娘が、唐突にのたまった。

持参した陶器のマグカップになみなみとカフェオレを注ぎ、ついでに「師匠もコーヒー飲みますか？」と訊く。

弟子たるもの、まずは師匠に御伺いをたててから、自分の分を淹れるのが普通ではないのか。そう頭の隅でちらりと思わないでもなかったが、娘に師匠呼ばわりされている青年は無言のまま、いるともいらないとも応えなかった。

青年の意を汲んでなのか勝手に憶測してなのか、青年の分のコーヒーも淹れてから、娘は当たり前のように青年の向かい側に腰を下ろした。

魔法使いになりたいからと、無理やり弟子入りしてきた娘は、すっかり我が物顔で魔術師の隠れ家に長時間居座るようになった。自宅から通ってきているから、寝泊まりはしない。女子高校生の弟子は、学校から帰ってすぐ異空間の扉を開け、師匠に会いに来る。娘曰く、部活動みたいなものだから！らしい。

部活動といっても、その活動は非常に地味だ。しかも娘ひとりしか“部員”はおらず、指導者であるはずの青年もほとんど協力をしない。娘は一人で早口言葉を練習したり、本の朗読をしたりしている。気が向くと、師匠が間違った言葉を静かに訂正してくれるから娘としてはそれでやや満足だった。もうちょっと積極的に協力してくれたり指南してくれたりしてもいいのかなあと思い、それを要求してはみるのだが、大抵は無視されてしまう。

娘が師事している魔術師の青年は、言葉を操る魔術師であるとい

うのに、極端に口数が少ない。

「一番長く喋って、うるさいとか静かにしろとかですもんねえ。まだ一度も呪文聞かせてもらえてないし。喋らないままだと舌の動きが悪くなっていざって時に困るんじゃないですか？」

「……」

娘はというと、青年の何倍もお喋りであるから、もとは閑寂だった隠れ家も以前とはことなく様相が変わり、沈黙の帳が降りにくくなっている。たった一人の娘の存在が、魔術師の静かな日常をいとも容易く変えてしまった。

青年の腰かけている椅子の背もたれの端に止まっているカラスもまた、時折呆れたように「カア」と鳴き声をあげるようになっていた。魔術師の使い魔は、普段は主に似て物静かだ。

「たまには喋る練習、師匠もした方がいいですよ。ほら、一緒にこの早口言葉言いましょうよ。あかまきまきまきまきの！」

「……」

赤巻き紙黄巻き紙だと訂正するのも馬鹿らしく、青年は灰青色の瞳を軽く伏せて嘆息した。

押しかけ弟子は、現れ方がそうであったように、なにを言いだすのか予想もつかない突飛さがある。

いきなり占いはしないのかと問われて、魔術師の青年は、僅かに眉をあげた。

「魔法使いなんだし、占いくらいできるんじゃないんですかって思っつて。手相とか人相とか」

「……」

魔法使いではなく、言の葉を操る“魔術師”だと、初対面の時にも言ったはずだが。そう目で訴えるも、娘は意に介さない。それどころか、

「あ、言葉の魔法使いなんだから、こっくりさんとかやつたりする

んですか？」

などと、的外れなことを平気で言っただけのだから性質が悪い。冗談を言っている顔でもないのがまた青年のため息を誘うのだ。

沈痛な面持ちで、若干わざとらしげに嘆息してみても、押しかけ弟子にはなんの効果もない。

しかたなしに、青年は尋ねてみることにした。

「いきなり占いとは、なんだ。なにが聞きたい」

今日一番の……いや、ここ数日間が一番の長台詞喋った！と、

大仰に驚いて見せてから、娘は次の句を継いだ。

「いや、あのですね。師匠、恋占いしてくださいよーってことで」

「恋？」

「うつつ」

いきなり娘はテーブルにつっぱした。

「……………なんだ」

青年は眉をしかめ、またしてもしかたなく訊いてやった。どうしたのかと聞いてほしそうなオーラが、娘の背中からありありと浮かびあがっている。

「失恋したんですうつつ」

「……………」

娘はウワアアンと、本当なのか嘘なのか、大袈裟な泣き声をあげた。傍にいた黒カラスは翼をバサリとひろげ、窓辺へ逃げた。娘の黒くて長い髪が、羽ばたきの風で少し乱れてテーブルに広がった。

「失恋したら髪の毛切るのが昔からの定番だけど、まほーつかい目指してる身としては切れないし！」

娘はむくりと上半身を起した。

嘘泣きではなかったらしく、涙目だ。

「っていうか、今日失恋ホヤホヤだから髪切りに行く時間的余裕もなかったんですけど」

「……………」

娘は髪の毛には魔力があると信じていて、それゆえに伸ばし中ら

しい。

別段、髪が長からうが短らうが魔力に影響はないはずだがと、青年はそう思っていたがあえて口にせずにはいた。青年自身、長髪だった。髪に魔力があると思いきやこんだ根拠がどうやら青年にもあるらしい。魔力を蓄えるために髪を伸ばしているわけではないのだが、いちいちそれを言うのが面倒で、黙っていた。どうとでも解釈すればいいと、投げやりに思っているのも否めない。

髪のこととはさておきと、娘は早口に語りだす。

「ずーっと片想いしてた先輩なんですよー。で、思いきって告白したけど彼女いるからってすぱっと断ってくれちゃって！ 勿体ぶりもしない先輩かつこいいよ、まあ、やっぱ好きだよー」

それから数分、青年は娘の恋話をうんざりするほど聞かされる羽目となった。

何しろ出逢い編から告白編までの長い話だ。適当な相槌も打たず、ただひたすらに口を噤んで、真摯に耳を傾けているふりをしていた。あつさり玉砕の失恋してしまったので、占いがどうか言うよりも、単に話を聞いてほしかったのだろう。

「師匠！」

一通り話し終えてから、娘はパンツと両手でテーブルを叩いた。

「可愛い弟子が失恋したんですよ！ なんかこう言うことないんですか！？ たとえば、ええっと……、いい男は他にもいるとか、この先いい相手がなかったら私が責任とってもらってやるとか！」

「……………」

「まあ、師匠に責任とってもらうんなら、ちゃんと魔法使いにしてもらえる的な責任が嬉しいんだけど」

「……………」

「ちよつとくらい気の毒がっても罰はあたりませんよ、師匠！」

「気の毒がられたいのか」

「……………」

今度は娘の方が口を噤む番だった。むっつりと顔をしかめ、唇を

尖らせた。

青年の声音はいつも通りに低くて静かだ。表情も、森の奥にひっそりと水を湛えている湖のように凪いでいる。

娘は拗ねた顔をぷいっと横向けた。

「気の毒がられたくは……ないけど」

慰めてほしい、というのが本心だ。

失恋して心が弱りきっているのだから、少しくらい甘えたっていいじゃないか。いつも甘えきっている気がしなくてもないけれど。

目と頬を赤くし、ふくれっ面でそつぽを向く弟子に、青年は不意に手を伸ばした。

「占術も様々に種類がある」

言ってから、青年はつまむようにして弟子の丸い顎を掴んだ。そして自分の方に、卵型をした弟子の顔を向かせ、灰青色のまなざしを注いだ。

「……っ!？」

青年の唐突な行動に娘はぎょつと驚き、眼前にある端正な面貌を凝視した。

「呪術と違い、占術はさほど得意ではないが」

「……どこがどう違うんですか？」

「……………」

相変わらず「呪術」の発音が苦手らしい弟子に、「呪術」と「占術」、二つの違いを詳細に語ってやる気は起きず、青年は無視して次の行為に移った。

弟子の顔を引き寄せ、青年は額と額を合わせた。じつと弟子の瞳を見据える。娘もまた目を閉じず、青年の灰青色の双眸に吸い込まれそうになりながらも、眉間に力を入れて見つめ返していた。

「未来視の術だ。今宵、知りたい未来を夢で視るだろう」

その言葉そのものが、術だった。

青年の声がいつもと微妙に違うことに、魔力を身の内に宿してい

る娘は気がついた。心の中に浸透していく、さざ波のようにやわらかな声音だった。それでいて、重量感がある。

言の葉を用いた「占術」だ。

術を施し終えてからすぐに、青年は指を離した。弟子はぼうつとしたままだ。術のせいというよりも、師匠の思いがけない行為に驚きすぎたようだ。ぼう然として目を丸くしている。涙は引っ込んだが、頬の赤みは消えない。それどころかさらに熱っぽくなり、熟れた林檎のようになっていた。

師匠の顔が離れても、娘は硬直したようにその場に固まり、ぽかんと間の抜けた顔を晒している。

そして数秒後。

娘は脱力しきったため息をつき、感慨深げに呟いた。

「師匠って……なにげにスケコマシだったんですね……」

娘の言葉に青年は眉間の皺を一層深く刻んだ。

「破門にされたいのならいつでも言え」

はたして、声を大にして「破門とか横暴っ！」と反論した娘は気づいたろうか。

破門の一言で、言の葉を操る魔術師の正式な弟子になったということに。

時間（前書き）

「輝石」のその後の話です。

時間

三月の第二土曜日。

好いお天気だけど、少し風が強い。

ありがたいことに花粉症ではないわたしはマスク要らずで過ごしているけれど、すれ違う人達の何人かはマスクをしていた。もうここ数年、春の風物詩となった感のある光景だ。

「たいへんそう……というか、ほんと、気の毒」

と呟くわたしに、花粉症に悩まされてる友人らは、「いつかはあんなだつて、わたしら仲間入りするのよー」なんて脅かしてくる。そうはいつでもこればかりは、多分「運」だろうから、なるかもしれないし、ずっと花粉症にならないままかもしれない。

ともあれ、乾燥しきつた空気と、風に舞い上がる砂塵に辟易する程度で済んでいるのは、たしかにラッキーなんだと思う。

晴れ渡った空を仰ぎつつ、自分のラッキーさを天に感謝してみたりした。

春というにはまだまだ肌寒くて、スプリングコートに替えるには早すぎる、今時分。かといってファーつきのダウンコートは重たいからと、今日はオフホワイトのキルティングコートを羽織った。デニム地のショルダーバッグとスウェードのブーツはお気に入りのものをチョイス。全体的にカジュアルにまとめた。休日のスタイルはいつもこんな感じ。ジーンズがメインで、ラフな格好をしてばかりいる。オンとオフで服装が変わるから、雰囲気が変わると言えないこともない。といつても、そんなに大きく変わるってことはないと思う。少なくとも、自分はすぐ変えてるって気はしないから。

けれど、並んで歩く彼は、「すごく新鮮だ」と嬉しそうに微笑んでいる。たしかに今までは、いかにもOLというスタイルしか見せ

てなかったから、そんな風に言われると、若干照れくさい。

新鮮というのなら、それは彼、三井倉理さんの方こそだ。

わたしが知る三井倉さんの格好は、ぴしっと糊のきいたシャツとスラックス、そしてカフエエプロンという、バーテンダーとしてはたぶん定番と思われる着衣だ。白シャツに黒かえんじ色のベストにネクタイ、逆に黒シャツに白っぽいネクタイを締めていることもあった。

今日のようにカジュアルな格好を見るのは初めてだ。

デニムパンツに、ちよつとごつつい感じのするトレッキングブーツ、それにスタンドカラーの黒いモッズコートがよく似合ってる。痩身だなと思っていたけれど、存外逞しそうな胸元に、どきりとした。

三井倉さんと会うのは、いつも同じ所。三井倉さんが勤めている「Mimosa」というカクテルバーで、わたしは客として、彼はバーテンダーとして、わたし達はとくに約束もなく会っていた。日を決めて、こうして店の外で会うのは、今日が初めてだ。

彼の勤めているカクテルバーの定休日は水曜日。その他にも臨時休業の日もあるけど、金曜日と土曜日が休みになることはまずない。サービス業なのだからこれは当然だろう。

かくいうわたしは、土日が休み。事務業、いわゆるOLなので、たまに休日出勤もあつたりするけど、基本的には土日休みの、週休二日制。

そんなわけだから、わたしは今日、普通に休みなのだけど、三井倉さんはわざわざ休みをもらってくれたのだ。申し訳ない。

「せっかく晶枝さんが誘ってくれたのに、断るなんてもったいないことできないよ」

と、三井倉さんは笑ってくれた。

さらに、「三井倉さんなんて、堅苦しいな。理^{わい}でいいよ」とも言ってくれた。「俺の方が年下なんだから」とは言わなかったけれど、気を遣ってくれたのかもしれない。

三井倉さんの方が年上だと思い込んでいたのだけど、実はわたしより二つ年下だと知ったのは、ごく最近のこと。ちよっぴりシヨックだったのは、三井倉さんには内緒だ。

でも、三井倉さんから年齢を聞いた時、わたしときたら大仰に驚いて、迂闊にも「年上だとばかり！」と漏らして、三井倉さんに苦笑されてしまったのだ。だから、もしかしたら三井倉さんの方がシヨックを受けてるかもしれない。

それなのに三井倉さんは不快な顔ひとつせず、

「敬語とかも必要ないよ、店の方でも」と、言ってくれた。

敬語といったって、崩れた敬語だ。ちつとも畏まってなんかない。何より染みついた癖みたいになっちゃって、急には変えられそうになかった。

だいたい、今の状況にもまだ少し戸惑っているのだから。

三井倉さんから想いを告白されて、一ヶ月が経った。

あの時のことを思い返すと、今でも頬が熱くなる。

わたしも三井倉さんのことをずっと気にかけていて、……はつきりとした自覚はなかったけれど、ずっと恋をしていた。それに気づかされた、三井倉さんからの告白だった。

ふと、左手に目をやった。左の、薬指。

今はないけれど、さっきまでそこにあった、アメジストの嵌められた指輪。

先月の誕生日に……世間ではバレンタインデーのその日に、三井倉さんから贈られたアメジストの指輪は今、サイズ直しに出ている。ついさっき、三井倉さんが買った店に依頼しに行ったところだ。

三井倉さんは首の後ろに手をあて、ちよつと肩を竦めた。

「サイズ、大丈夫だと思ったんだけど、……ごめん」

「やだ、謝らないで下さいよ。ちよつとだけ大きかっただけなんで

すから。それに、お店の人も快く受けてくださったし。よくあることなんですよ、こういうの」

「だからというか……。店員のあの笑顔が……からかわれてるみたいで、なんていうか、居たたまれなかったなあ」

店を出てから、三井倉さんはため息をついてばかりだった。相当に恥ずかしかつたらしい。

バーテンダーでいる時の三井倉さんは感情を露わにせず、泰然と構えてて、気障な台詞でもさらりと言ってしまうし、それが自然と似合っているのだけど、オフでの三井倉さんはかなりの照れ屋のようだ。顔つきも口調もちよっと違ってて、一人称も「僕」ではなくて「俺」になってる。

「指輪、五日後ですね」

店員に渡された引き換え証の日付を確認した。思ったより早くに手元に戻ってくるのが嬉しかった。

「わたし、取りに行ってくるきますね」

「俺が行こうか？ 店に行く前に寄っていけそうだし」

「わたしが行きますよ。もう一度サイズ確認しなくちゃいけないし」

「あ、ああ、そっか」

「そしたらまた、お店の方に顔出しますね」

「それは嬉しいけど、あまり無理しないで」

「一杯くらいは飲みたいですから。そうだ、たまにはミモザを頼もうかな」

額にかかる髪をかきあげ、三井倉さんは「それは珍しい」と笑った。眩しそうに目を細めてわたしを見やり、言葉を継いだ。

「シャンパンベースのものは時々飲んでるようだったけど、ソーダ割りのカクテル……たとえばカンパリ・ソーダとか、晶枝さんはほとんど頼まないね？ 苦手？」

「炭酸系は普段からあまり飲まないから。苦手というほどでもないけど」

「それじゃあもしかしてビールも苦手？ 今度おいしい地ビールを

紹介しようと思っていたんだけどな」

「あ、嫌いじゃないから、教えてもらえると嬉しいわ。炭酸はすぐにお腹がはっちゃって、量を飲めないってただだから。けど、黒ビールはちよつと苦手、かな」

「晶枝さんは辛口が好きだと思っていたから、ビールもそうかと思つてたんだけど、そうでもないんだ。でも、飲める口には違いない」と

「もう！ 人を飲んべえみたいに言わないで！」

ぱしんつと、三井倉さんの腕を叩いてやった。三井倉さんは朗らかに笑つてゐる。とても楽しそうで、一緒に並んで歩いてゐるわたしも、やつぱりとても楽しかった。心が弾んでいる。

朝の十時に駅前で待ち合わせて、それからもう二時間弱。

もつと早い時間に約束すればよかったなと思うほど、三井倉さんと語らつて歩く時間は、とても楽しく、あつという間に過ぎてしまった。これからランチして、それからわたしが行つてみたいところばした博物館にも行くことになってゐる。そしてその後、できたらデイナーも一緒にと予定している。きつと、午前中だけのことじゃなく、今日一日があつという間に過ぎてしまふんだらう。

ふわりと、甘い香りがして、わたしは足を止めた。

近くにある公園に、目を向けた。公園を囲むようにして植樹されている木の大半は、桜だ。たぶんソメイヨシノだらう。他に低木も植えられていて、サザンカはもう花を落としていた。次はユキヤナギが真っ白な花を咲かせるだらう。サツキの花期はまだ先だけど、濃緑色の葉が元気良く茂っている。真昼の公園には親子連れが多く、はしゃぎまわる子供たちの声も元気よく響いていた。

公園内には煉瓦で囲われた花壇もあった。ビオラやストック、マリーゴールド等の花が色鮮やかに咲き誇っている。

そういえば、さつき通り過ぎた家の庭、ミモザの花が咲きかけていた。ぽんぽんと小さな毛玉が寄り集まって咲く、黄色の花。

その花の色にちなんだカクテルが「ミモザ」だ。咲きかけのミモ

ザを見たせいで「ミモザ」を飲みたくなつたみたい。それを言ったら、三井倉さんは「それじゃあとおきおきのシャパンを用意しておかなくちゃ」と微笑んだ。

今、ここにこうして香ってくる花の香りは、ミモザではなく、どうやら梅の花のようだった。

公園の敷地内に薄桃色の梅の木が三本ほど植えられているのが見て取れた。梅の花は満開の時期も過ぎて、時折風に吹かれ、花弁を散らしていた。

そろそろランチにしてもいい時間だけれど、二人でそろそろ歩きをしているのが楽しくて、寄り道をしたくなつた。

「その公園、ちよつと寄っていきませんか？」

三井倉さんは快く同意してくれた。

わたしが梅の花をしみじみと見つめたり香りを確かめたりケータイのカメラで写真を撮ったりしているのに、三井倉さんはずっと付き合ってくれた。

わたし一人だけが浮かれはしゃいじゃって、なんだか恥ずかしいなと思い始めた頃だった。おもむろに、三井倉さんが口を開いた。「晶枝さん、改めて聞きたいんだけど、いいかな？」

「え？」

振り返り見た三井倉さんの表情は、指輪のサイズ直しに行った宝石店にいた時と同様に、緊張からか羞恥からか、ひどく硬く、所在なさげなものだった。心許ない様子で視線を泳がせている。

「今更こんなこと聞くのは野暮だし、失礼でもあるし、情けないんだけど」

「……？」

わたしは小首を傾げ、三井倉さんの様子を窺った。

三井倉さんはまるで、叱られるのを覚悟しながら自分の失敗を打ち明ける子供のような顔をしている。

カウンターの向こうで背筋を伸ばし、店内をさりげなく見回しながら、注文されたカクテルを手際よく用意するバーテンダーの三井倉さんとは別人のようだ。

「……本当によかったのかな、と。我ながらちよつと気障だったなつて思う告白の仕方だったし、雰囲気は酔わせたみたいなどころがあるから、晶枝さんの気持ち疑つてるとかそういうのではなく、なんというか……」

三井倉さんは不明瞭に言葉を継ぐ。

「指輪を受け取ってくれて嬉しかったけど、サイズも知らないくらい、俺は晶枝さんのこと知らなくて。それなのにいきなり好きなんて言つても、信じられないんじゃないかとか、そんなこと考えて……」

三井倉さんの頭部や肩に、ひらひらと薄紅の花びらが散り落ちていた。

「三井倉さん」

わたしは一步、三井倉さんに歩み寄つて、肩に落ちていた花弁を払つた。三井倉さんと視線がぶつかる。三井倉さんの瞳はひどく頼りなげで、けれど甘く香つてきそうな艶もある。

「よかった」

わたしは三井倉さんを見つめ、微笑んだ。三井倉さんは「え？」と目を瞬かせる。

「三井倉さんも同じ不安を抱えてたんだつてわかつて、ほつとしたわたしだけが戸惑つてたんじゃないんだなつて」

「……………」

「わたしも、まだ三井倉さんの一部しか知りません。お店でしか会えなかったんだから、それも当然ですよね？」

「……………」

「それでもわたしは、三井倉さんのこと、もつと知りたいつて思つてた。でも、自分ではどうしようもなく、だから三井倉さんの方から近づいてきてくれて、本当に嬉しかった。驚いたけど、嬉しか

った」

三井倉さんは黙然とわたしを見つめている。
胸がときどきする。

今度はわたしの方が恥ずかしくなってきた。お酒も飲んでいないのに、頬が熱くなってきた。

「指輪のサイズなんて、自分でもよく分からないだし、三井倉さんが知らなくなつて、そんなのは普通ですよ？ そんな些少なこと
で三井倉さんを信じられないって疑るなんて、自分的にはありえない。第一、指輪のサイズなんかよりも、三井倉さんはもっと大切な
こと憶えてくれたじゃないですか」

ためらいがちな三井倉さんの表情が、少しずつ緩んでいくのが見て取れた。

ほつとして、さらに言葉を継いだ。

「それに、指輪をもらうまで、わたしは三井倉さんの気持ちに全然
気付けなかった。そんなわたしが三井倉さんを好きだといつても、
やっぱり信じられませんか？ 指輪も、すごく嬉しかったってこと
も？」

「いや」

三井倉さんは微苦笑して、軽く首を横に振った。三井倉さんの唇
が開き、「ごめん」という小声が漏れた。

「こうしているのが嬉しすぎて、逆に不安になったなんて、かつこ
悪いな……」

「それも、同じですね」

わたし笑って応じた。

「ホワイトデーのお返しだつて、わたし、ずっと悩んだ。三井倉
さんの嗜好とか、わたし、全然知らなくて、結局、今日のランチ奢
りますねってしか言えなくて。情けない気持ちでいっぱいだったけ
ど、三井倉さん、会った時から嬉しそうにしてくれて、すごくほ
つとしたんです」

だからわたしも嬉しくて、浮かれていた。ちょっとはしゃぎ過ぎ

たかしらと、不安になりかけていたところに、三井倉さんが本心を吐露してくれた。わたしの不安を代弁してくれたかのように。

三井倉さんに先手を取られてしまったと、わたしは苦笑した。

「わたし達、お互いまだ知らないことが多くて、でも知らなかった分だけ、これから知っていく楽しみもあるって思いませんか？ 同じ気持ちを抱えてるんだって、今、分かりあえたみたいに」

「うん」

照れくさそうに、三井倉さんは首肯した。

「ありがとう、晶枝さん」

そう言って明るく笑う三井倉さんが、真昼の光のように眩しかった。

知り合っていていける時間が多ければ多いほど、三井倉さんを好きになつていくような気がする。

そんなわたしの意を見透かしたように、三井倉さんはいきなりわたしの左手を握り、「晶枝さん」と顔を近づけてきた。

「惚れ直さざるを得ないな」

「……っ」

甘やかな笑顔を向けられ、わたしは息を詰めた。

「こんな短時間の間に、こんなに惚れさせて。どうなっても知らないよ？」

「え、ええっ？ どうなってもって！」

「これからたつぷり時間をかけて、責任とってもらわなくちゃ。あ、いや、俺もちゃんと責任とるつもりでいるから」

「え、あ……っ」

三井倉さんは急に真剣な顔になったかと思うと、握ったままのわたしの左手をぐっと引き寄せ、白昼の公園内だというのに、キスを迫ってきた。

拒む余裕もなくて、気がつけばあっさりと唇をかすめ取られてしまった。

「みつ、三井倉さんっ！？」

啄ばむような軽く短いキスだったけれど、あまりに不意打ちすぎた。わたしは目を白黒とさせ、みつともないくらいに狼狽してしまっただ。

なのに、三井倉さんときたら、さっきまでの戸惑い顔が嘘のように、したり顔で微笑んでいる。

「ホワイトデーのお返し、ありがとう、晶枝さん」

「えっ、ええっ？」

今の？ 今のキスがもしかして？ ホワイトデーのお返しになったの？

呆けてるわたしの手を握ったまま、三井倉さんは「そろそろ、ランチにしよう」と歩き出し、わたしは慌ててそれについていく。

「ちよっ、ちよっと、三井倉さん！」

「ん？」

わたしは早足になって、三井倉さんの横に並ぶ。そして三井倉さんの手を握り返した。

「今のだけじゃ、全然お返しした気分になれませんから！ もっと、ちゃんとさせてください」

「うん、わかった。願ってもないよ」

三井倉さんは心底嬉しげに笑った。それでわたしは迂闊なことを言っただけと気づき、焦って訂正した。

「い、今のはっ、ランチはちゃんと奢らせてくださいって意味ですからね！」

「うん」

わかってるよと三井倉さんは言う。だからわたしも、怪訝そうな顔をしてみせたものの、あえて念を押したりはしなかった。

それに、……分かられ過ぎてる気がしないでもない。

だから、三井倉さんの期待に応えてあげてもいいかななんて、ちよっただけ思ったりした。それはもう少し時間をかけてから、伝えよう。

春風に背を押され、わたしは三井倉さんの横にぴたりと身を寄せた。手は、お互い握ったまま。

「いい天気だな。花粉と黄砂も飛んでそうだけど、空が青い」

三井倉さんがほのぼのとした口調でいい、空を仰いだ。花びらを舞わせる風に鳥達も翼を乗せ、軽やかに飛び交っている。

「春ですね」

わたしが言うと、三井倉さんも「春だね」と、わたしの顔を見つめて微笑んだ。

一緒

頬杖をついて、窓の外をぼんやりと見つめる。放課後の教室には、あたしと一真^{かずま}、二人だけが居残っていた。

「桜も、もうすっかり葉桜になっちゃったね」

のほほんとした口調で一真は言う。言いながら、手は休めず、あたしの髪をいじっていた。

一真の器用な手は、あたしのあまり行儀のよろしくない髪の毛を、まるで猛獣使いみたいに手なずけて、見違えるほどきれいに落착かせて、まとめてくれる。

「相変わらず器用だね」とあたしが感心して言うと、一真は上機嫌に笑って「練習させてくれる人がいるからね」と返してきた。「ありがと、菜々」

ありがと。それは、あたしの台詞だと思っただけだな。

あたしはあえてそれを言わず黙り込み、代わりに小さなため息をついた。

* * *

一真は小学校の時から幼馴染みで、小学生の時は三年生と四年生の時に同じクラスになって、中二の時と三年になった今、また同じクラスになった。

色白で小柄で、運動神経がちょっと鈍くて、おっとりした一真は、見た目が女の子っぽくて可愛かったから、昔からよくクラスの男の子達にからかわれてた。

おとなしい一真をからかって苛めてるやつらを拳で撃退するのは、あたしの役目だ。

もともと喧嘩っ早かったあたしは生傷が絶えず、いつも一真に心

配をかけていた。

一真は心配そうな顔をしてあたしの後をついてきて、傷の手当てをしてくれた。それに、ぼさぼさになった髪を梳いて、まとめてくれたりもした。

「ね、菜々？ 髪の毛もつと伸ばさない？」

一真はあたしの髪を掴んだまま、腰を屈めてあたしの顔を覗き込んでくる。

一真はさつきから、あたしの髪をブラシで梳き、整え、結つてくれようとしている。一真は昔頃から手先が器用で、髪の毛を結ったり縛ったりするのが上手だった。

まとまりの悪いあたしの髪の毛も、一真は難なくまとめてくれる。「うーん、これ以上伸ばすのはめんどうだなあ」

あたしはぼんやりと空を眺めたまま答えた。一真に髪を梳かれている今の状態は、まるで手綱を握られてるみたいで、ひどく落ち着かない。だけどその反面、奇妙な安堵感もある。

一真に髪を梳かれるのは、気持ち良くて、好きだ。

昔はもつと短くて、ちんまりとしたおさげくらいしかできなかった。いつそベリーショートにしたかったんだけど、一真に、「短いかえって手入れが大変なんだよ」と丸めこまれて、結局やめた。

伸ばしてみようと思いついたのは、去年あたりだったろうか。一真が、あたし以外の……同級生の女の子の髪の毛を整えるのを見たのがきっかけだったかもしれない。

あたしはため息をつき、顔を一真の方に向け直した。

「一真は美容師になるんだよね？ それってさ、もしかして……」「うん」

一真はにつこりと明るく笑って答えた。一真は幸せそうに微笑んで、肩甲骨につくつかつかないかの長さのあたしの髪を、細い指に絡めている。

「もしかしくなくても、菜々が勧めてくれたからだよ？ 僕自身興味

もあつたから、菜々に背を押されたつてところかな」

「そつかあ……」

あたしは項垂れ、それから机に突つ伏した。

情けない顔を一真に見られなくなかった。

「すごいね、一真は」

「菜々？」

一真の声が近い。きつとあたしの隣に腰かけて、腕の隙間からあたしの顔を覗き込もうとしてるに違いない。

「どうしたの、菜々？ 僕、何か気に障るようなこと言った？」

「ううん。そうじゃないよ。一真はちつとも悪くないし、すごいって言ってるの。それでちよつとへこんじやっただけ」

「菜々、泣いてるの？」

「泣いてない」

それを証明するために、顔を上げた。思った通り一真はあたしの横に腰をおろして、心配そうな目をしてあたしのことをじつと見つめている。一真のその気遣わしげな目は昔から変わらない。

それなのに、変わってきているんだ。

一真はもう昔のいじめられっこの一真じゃない。あたしの後を仔犬みたいに追いかけてきた一真じゃないんだ。

「一真はもう自分の進路決めてるんだよね。それってすごいなって思っで。あたしなんかまだ全然、何にも考えてなくっでさ。一真はさ、もうとつくにあたしのことなんて追い抜いちゃってるんだなあっで」

「菜々が僕の手を引つ張つてくれたからなんだよ？」

一真はあたしの腕に、さっきまで器用に動かしていた手を置いた。一真はあたしを見つめ続けている。真剣なまなざしが、あたしの目を逸らさせない。

「菜々、僕に言つたよね。苛められていじめてばかりいた僕に」

小学四年の春のことだったよ、と一真が言った。

クラスのいじめっこ達にからかわれ、一真は半ベソをかいていた。あたしはいじめっこ達を撃退した後、一真の手を引っ張って歩き出した。あたしは擦り傷と打撲を負ったけど、いつものことだったから、別段気にしてなかった。一真の方が痛そうな、苦しそうな顔をしていた。

一真はしょんぼりと頂垂れて、弱音を吐いた。今にして思うと、一真の弱音を聞いたのは、あれが最初で最後だったかもしれない。「僕、菜々ちゃんに助けられてばかりだね。ダメなやつだって、菜々ちゃんも思ってるよね？」

「何言ってるの？ 一真は全然ダメじゃないよ！」

あたしは振り返り、憤然として言い返した。

「誰かを苛めていい気になってるやつらなんかより、一真の方がずっと偉いよ！」

「だけど」

「このまえさ、一真、うちのおねーちゃんのをきれいに結んで飾って、きれいにしてくれたよね？ あの時おねーちゃんすごく喜んで、ほんとに嬉しそうだった。そういう風に、誰かを喜ばせていい気持ちにさせるのって、すごいことだと思う。簡単そうで簡単じゃないことだもん。そういうのができる一真はすごいんだよ！ あんなやつらより何倍もすごくて、最強なんだよ！ だから自分のことダメなんて言わないでさ、一真は一真にできることをやればいいんだよ。一真を苛めるやつはあたしが撃退してやるし！ ねっ！？」

そしてあたしは、一真に美容師になったらって勧めたんだっけ。あたしも協力するからって。

一真は、あたしの身勝手ともいえる励ましと要望を、「嬉しかったんだ」と語った。

「僕はいつも菜々に庇われてばかりだったでしょ？ 嬉しかったんだけど、情けなくて、自分のそういう弱いところがすごく嫌だったんだ。だけど菜々は、僕を弱虫だとか男のくせにだとか、そういうこと、一度だつて言わなくて、それどころか強いって言うてくれた。それがすごく嬉しかったんだ」

「……………」

照れくさくなって、顔を背けた。

一真に見つめられると、ときどきする。なんだか泣きそうになる。「僕はあれからずっと菜々のこと追いかけてるよ？ いつになったら菜々に手が届くのかなあって、必死で追いかけてた。引つ張ってもらうんじゃないくて、手を繋いで一緒に歩きたいって思ってた。だから菜々が励ましてくれたように、僕は僕のできることをしてそれで頑張つて、菜々の傍に行こうって思ってたんだ。……ねえ、菜々？ こっち向いてよ」

「……………」

「ちゃんと菜々の顔見て、言いたいんだ」

「お礼？ それならさっき聞いた」

「そうじゃないよ。ねえ、もしかして菜々、焦らして楽しんでる？」

「な、なんのこと？ 何言ってるの？」

思わず振り返ってしまった。と、それとほぼ同時だった。

一真はいきなり両腕をあたしの背に回し、肩口に額を乗せた。そしてちよつと切なげな声で言ったのだ。

「僕、菜々のことが好きだよ」

「……………」

あたしは息を詰まらせた。二の句が出ず、体も金縛りにあつたみたいに動かない。

一真のあたしを抱きしめる腕は、きつくもなくゆるくもなく、なんとなくこちないものだった。

「菜々のこと、大好きだ」

「なっ、なん……………」

「これからもずっと、菜々の傍にいたいし、こうやって触れていた
いって思う」

一真は顔をあたしの肩から離れた。だけど腕は解いてくれない。
そしてこそばゆそうに言うのだ、あたしの髪に頬ずりして。

「菜々の髪、気持ちいい」

「やつ、やらしいよ、その言い方っ！　っていうか、急に何？　急
にそんなこと言われても、あたしはっ」

ここでようやく、一真はあたしから少し体を離してくれた。とは
いえ、二の腕は掴まれちゃってるから、逃げ出そうにも逃げ出せな
い。

「急じゃないよ？　遅いくらいだって、菜々も思ってるんじゃない
？」

「……そんなこと……」

「だって菜々、はつきり言っただけさ。拗ねてるみた
いにそっぽ向いてため息ついて、僕が何も言わないからイライラし
てるのかなって。だから、菜々」

「……っ」

心臓が破れそう。耐えきれず、あたしはまたそっぽを向いた。

顔だけじゃなく、耳まで赤くなってるの、鏡を見なくなっただけ分
かる。きつと目も赤くなってる。鼻の頭まで赤くなってるんじゃない
かな。……だって、なんだか泣きそうだ。

「菜々も言ってくれたらいいのに」

「な、何をっ」

「菜々の気持ち」

「そんなのっ」

あたしはみっともないくらいに狼狽しまくって、泡を食っている。
一方の一真は、憎らしいくらい余裕綽々で、いじめられっこの片
鱗はもうどこにもなくなってる。……ずるいつたらないよ！

「うーん、そうだな、言わないなら、……代わりに」

「えっ」

「いいよね？　ちょっとだけ」

「……っ！？」

一真はしたりと笑って、あたしの絶句を、諾と勝手に解釈した。そしてあたしの体を引き寄せる。

やわらかく、唇の先を触れさせるだけの、一瞬の軽いキス。あっけないほどの、ファーストキスだった。

一真は照れくさそうに笑って言った。

「ありがと、菜々」

あたしはちよつと、茫然自失としている。

射しこんでくる夕陽の光が一真の白い容貌を照らし、淡い朱の色を浮かせていた。だけど、あたしの顔は一真よりも濃い朱色に染まっているのだろう。

「これから一緒にいようね」と一真に言われ、笑顔につられるようにこくと頷いた。そうしてからやつと、あたしは我に返った。

「とつ、とりあえず、髪、ちゃんと結んでよ。ふつーに、みつあみでいいから」

「うん」

そしてまた、一真は満足げに笑った。

唯一

黒い髪を夜風になびかせ、カーリナは一人、空を仰いでいた。

まだあどけなさを面貌に残す少女は、所在なげに膝を抱えて座り込んでいる。

音をたてて降ってきそうな冷涼とした星の瞬きも、カーリナの心痛を和らげるには至らなかった。

晴れてはいるが、初春の夜風は冷たい。

どこかで早咲きの花が咲いているのだろうか。微かに甘い蜜の香りが風に乗って運ばれてきた。

だがその香りも、カーリナの哀愁を払うことはできなかった。それどころか気付いてすらいなかった。

村内を浸している殺伐とした空気が、花の香りを薄めているのかもしれなかった。

（屋根に上るなんて、いったいいつぶりだろう）

カーリナはしみじみと嘆息し、視線を落とした。

近頃は、屋根どころか木登りすらしていない。普通の女の子になっってしまったようで、そんな自分を詰まらなく感じていた。

子供の頃のカーリナは、冒険心と好奇心に富んだ、おてんばで奔放な女の子だった。同じ年頃の女の子達とたわいもないお喋りをしているよりも、男の子達と野山を駆けまわっている方が楽しかった。泥まみれになって帰宅し、母に叱られることもしばしばだったが、それでも川魚を釣って帰ってきた時などは、母のお小言はいつもより短くなり、父は呆れ笑いをしつつも、カーリナの腕前を褒めてくれた。

カーリナは魚釣りも得意だったが、何より一番の上手は、木登りだった。子猿のような身軽さでひよいひよいと枝から枝へと移って

いく。カーリナの身体能力の高さは、天性のものなのだろう。カーリナの遊び相手の男の子達も、カーリナの木登り上手には舌を巻いていた。

カーリナには、他に得意とすることがある。弓技だ。

これは幼馴染みのユルキに習った。

ユルキはカーリナより三つ年長だ。母親同士が親しかったこともあり、ごく自然に仲良くなった。

ユルキは弓が上手で、妙技ともいえる技を持っていた。

狙いを定めて矢を放ち、獲物を逃したことがない。夕闇の野を駆ける小さな野鼠すら、夜目の利く梟のごとくに、はずさず仕留めることができた。鍛えられた二の腕は逞しく、膂力がある。

ユルキは若木がすすくと伸びていくように健やかに成長し、立派な青年になった。今年十八になったユルキは、村の娘達の恋のさや当ての的になるほど、見目の麗しい青年となった。が、ユルキは的になったからといって易々と射とめられるようなことはなく、浮いた噂一つなかった。

十八歳といえば、もう立派な成人男性で、いつ嫁取りをしてもおかしくはない年齢だ。むしろ遅すぎるといっていい。

そのせいで、村の娘達の間では、ユルキの「嫁取り」に関して様々な憶測が飛び交っていた。

「ユルキはいったい、どの娘を妻に迎えるのかしら？」

「ユルキに想いを打ち明けて、あえなく断られたって子を四人は知ってるわ」

「それで喧嘩沙汰もあったのよね。横恋慕してた男から勝負を挑まれたって」

「ユルキにはずっと心に留めて、想い慕っている娘がいるって聞いたことがあるわ」

「それはもしかして……？」

「きつと、そうよ！　だってユルキったらあの娘の話しかないじゃない？」

「当人は気付いてなさそうだけど」

しかし、そういった村娘達の暢気な会話も、昨年からはぴたりと止んだ。

戦のせいだ。

隣国との戦が続いている。戦は終結する気配を見せず、その規模は広がりつつあった。戦況は思わしくない。戦災は辺境の村々にまで及んでいる。

戦乱の時代が始まりつつあった。それを、ごく平凡な村娘のカーリナですら感じとっていた。

谷あいの小さな村で生まれ育ったカーリナにとって、今まで戦などというものは、現実味のない絵空事のようなものだった。

知識としては知っていた。この国の領土を奪おうと戦をしかけてきた国も過去にはあったらしい。が、自国が強力な兵団を抱えていることを、カーリナは知っていた。その兵団が敵国をことごとく退けてきたということも、村の長老達から聞いていた。

だから今回もそうだろうと、カーリナはあっけらかんと思っていたし、過去そうであったように、自分達の知らぬうちに戦は終結するものだと思っていた。

ところが、今回は違う。

何が違うのか、どう違うのか、カーリナには分からない。

ただ、戦況が振るわず、そのために市井の民からも戦力となる男衆をかき集めているのだということは、人伝に聞いた。ほとんど強制的に行われているということも。

そしてついに、カーリナの住む村にも収集令が下った。幾人かの男衆が「戦力」として国軍に加わることとなった。

その中にユルキの名もあった。

カーリナに成す術はない。それが悔しくてもどかしくて、カーリナは膝を抱え、そこに顔をうずめた。満点の星空が、カーリナの震

える体の上にある。

どれほどそうしていただろうか、カーリナは人の気配に顔を上げた。

今の今まで思考の内にあった青年、ユルキがそこにいた。腰を屈めてカーリナの顔を窺うようにして見つめている。

やや傾斜のある木材の屋根の上、ユルキは怖れげもなくカーリナの横に立っている。

少し驚いたが、ユルキが両親に挨拶に来たのは知っていた。律儀なユルキは、世話になった人達に別れの挨拶をして回っていた。

「ここにいると思ったよ、カーリナ」

にこりと穏やかに微笑むユルキから、カーリナは反射的に目を逸らしてしまった。

「相変わらずだね、カーリナ。何かあるところして高いところに上るのは。小さい頃は、おばさんに叱られては屋根に上がって、泣きべそかいてたっけ」

「……………」

ユルキはカーリナの横に腰をおろした。カーリナよりもずっと大きく、逞しい体躯だ。明るい褐色のくせっ毛も淡い薄茶色の瞳も、カーリナとはまったく違う。

カーリナのまっすぐな髪は炭のように黒く、瞳は青みのかかった鉄色だ。黒髪は、この村では珍しい。面立ちは母親似だが、髪と瞳の色は、もとは他所者であった父のものを継いだ。肌の色もやや浅黒い。これは野外で男の子達と遊んでばかりいた名残だろう。

カーリナは元来、物怖じしない活発な性格で、考えるより先に行動を起こす積極的な娘だ。さばさばとした男勝りな性格のカーリナだったが、このところ、自分でも戸惑うくらいに、女くさくなっていた。誰が言うでもない。カーリナ自身が自分をそう感じていた。

「女くさく」なるのを、カーリナはひどく嫌った。母から散々、「

女の子らしくなさい」と言われ続けてきたせいかもしれない。反抗心からか、あるいは何かよく分からない恐怖からか、カーリナは「女」にはなりたくない切に願っていた。

そして、「女くさく」なってしまった自分を、ユルキに見られたくなかったのだ。

なぜなのか、それは分からない。……いや、分かっていて、目を逸らしたかったのかもしれない。今、ユルキから目を逸らしているように。

「カーリナ、もしかして泣いてた？」

ユルキに問われ、カーリナはムキになって「泣いてなんかないと返した。顔をユルキの方に向きなおし、キツと強気で睨みつけた。ユルキはほつと安堵したように笑った。

「僕は明日、村を出立する」

ユルキは言った。その表情も声音も、落ち着いている。落ち着きすぎるほどに。

カーリナはまたユルキから目を逸らした。きゅっと口の端を締め、同時に膝を抱えている手にも力がこもる。必死で、あふれ出そうになる感情を堪えていた。

「それで今夜はカーリナのところに来たんだ。おじさんとおばさんに、ちゃんと……」

「ちゃんと挨拶は、済んだの？」

カーリナはユルキの言葉を遮って、訊いた。ユルキを見ると、さつきとは違って少し強張ったような顔をしていた。困ったような、照れているような、どちらともつかない表情だ。いつもの明朗なユルキらしくない。

ふと、力の抜けたようなため息をつき、ユルキはカーリナを見つめ返した。

「本当は、真っ先にカーリナに言いたかった。カーリナの意向を無視したくなかったんだけど、つい、気が逸っちゃって」

「なに言ってるの？ 別れの挨拶なんて、そんなのは明日の朝だっ

てよかったのに」

明日の朝、皆と一緒にユルキを見送るつもりでいた。笑って手を振ろうと思っていた。……泣くもんかと決めていた。

だって、辛いのはユルキの方だ。

戦に行くなんて、愉快なことじゃない。物見遊山に行くのじゃない。命懸けの行軍に参加するのだ。

ユルキは狩人として生計を立てられるほどの腕を持っているが、しかし、的を人間にしたことは一度としてない。

カーリナ同様、かつてはやんちゃな少年だったユルキだが、元来性根は穏やかで、物に優しい。青年になった今は、その優しさが前面に出ている。

戦なんて、優しいユルキには向かない。けれど、嫌だと断る事も出来ないのだ。

だから泣き顔をユルキに晒したりしない。泣けば、優しいユルキはきつと困惑顔をするだろう。

ユルキはカーリナに甘い。我儘をいつだって笑って、聞いてくれた。ユルキの後を追いかけて走るカーリナを、時に立ち止まって、時に速度を落として、待っていてくれた。

父のように、兄のように、いやそれ以上の思いで、カーリナはユルキを慕っていた。

ユルキには様々なことを教授してもらい、与えてもらった。よい釣り場も教えてもらった。木登りのコツも、元はといえばユルキから教えてもらったことだ。カーリナの細腕でも引ける小さな弓も作ってもらった。

「わたし……」

ぼつりと、カーリナは呟いた。

「わたしも男だったらよかった。そしたらユルキと一緒に戦場に行つて、ユルキと一緒に戦えるのに。ユルキに教えてもらった弓術で、ユルキのこと守ることだってできるかもしれないのに……」

カーリナのこの言を母親が聞けば、女だてらに生意気なことを言

うものではないと叱ったかもしれない。だがユルキは嫌な顔もしないし、怒りもしない。ちよつと笑つて、「カーリナは勇ましいね。そういうところも相変わらずで、好きだな」と言う。そして、ユルキはさりげない口調で、続けざまに告白した。

「だけどカーリナが男だったら困るよ。だつて僕は、カーリナを妻にしたいんだから」

「……っ!？」

あまりにさらりと告白されて、一瞬何を言われたのか分からなかったカーリナだが、次の瞬間さつと頬を朱色に染めて目を見開き、啞然として、とんでもないことを告白したユルキを見つめ返した。

「おじさんとおばさんには、了承をもらつたよ。さっきも言つたけど、本当は真つ先にカーリナに言いたかつた。けど今日はカーリナ、僕のことずつと避けてたし」

「そ、それは……、だつて」

「カーリナ」

とまどい、恥じらうカーリナを、ユルキはぎゅつと抱きしめた。カーリナが身を擦つたため、背後から抱きしめるような格好になつた。

「女の子達が噂してた通りなんだ。僕は、ずっとカーリナのことを好きだつたよ。今でも、好きだ」

「……だけどわたし、女らしくないし、色だつて黒くてちつとも可愛くないし。ユルキに相應しい女の子じゃ……」

「そつやつて、僕のことを考えてくれてたんだね、カーリナ？」

「え？」

「自分は女の子なんだつて、それを意識したうえで、僕のこと見てくれるようになったんだよね？ カーリナには怒られるかもしれないけど、そういう風に思い悩んでくれたのが、すごく嬉しい。自惚れてしまつくらいに、嬉しかったんだ」

「……ユルキ」

カーリナの胸が、ときどきと高鳴りだす。恥ずかしくて顔を上げ

られないし、まさかユルキがと、心底驚いてもいた。けれど、ユルキの腕から逃れようとは思わなかった。

ユルキのカーリナを抱きしめる腕の力は強く、そして温かった。冷たい夜風からカーリナを守ってくれている。

ユルキは揺るぎのない口調で、改めてカーリナに求婚した。

「カーリナ。僕の妻になってほしい。僕が戦から戻ったら、僕の元へ来てくれないか？」

「……ユルキ」

ユルキの腕が緩み、カーリナはようやく顔を上げた。真摯な薄茶色の瞳とぶつかる。

「きつとこの村に帰ってくるから、その時は、どうか僕の妻に。その時まで、僕のこと待っていてほしい」

「……い、や」

カーリナは首を横に振った。一つに束ねられている長い黒髪が、さらさらと夜風に揺れた。

「いや。ただ待つてるだけなんて」

カーリナの瞳が、星の瞬きのように美しく煌めいた。潤みを帯びた、けれど迷いのないまなざしがユルキをまじろぎもせず見つめている。

「わたし、追いかけていく。じっと帰りを待ち続けてるなんて、いや」

「カーリナ……」

ユルキは困惑顔になった。まさか、戦場に妻となる娘を連れてはいけない。

「追いかけてくから。でも、しばらくは村で待っていてあげる。ユルキのこと待つてるから、だから早く帰ってきて。必ず無事で帰ってくるって約束して」

カーリナの我儘は、ユルキの胸を熱くする。ユルキは口元を綻ばせて、言葉を継いだ。

「うん。約束するよ。必ずカーリナの元へ帰って、そしてカーリナ

を妻にする。僕が、今までただの一度でもカーリナとの約束を違えたことがあった？」

「……………」

ない、と応える代りに、カーリナは紅潮している頬を隠すように、俯いた。

そしてそれが、結婚の承諾になった。カーリナはその瞬間に、自分の「女」の部分に改めて目覚め、ユルキにとって唯一の「女」になりたい気持ちに、気がついた。

それはひどく甘美で怖ろしい、だが泣きなくなるほどに温かくて優しい想いだった。

「ユルキ、約束だからね？」

カーリナが念を押すと、ユルキは破顔一笑して、それからまた愛しい娘を抱きしめた。そしてカーリナの唇に、己の唇をそっと重ねた。

この夜に交わした約束は、二人にとって、忘れえぬかけがえのない想い出となるだろう。

カーリナとユルキは、刹那の幸せを噛みしめるように口づけを交わし、永遠が留まるようにいつまでも抱き合っていた。

ずっとこうしていられたらいいのに。

カーリナは星の煌めきのような幸せと胸を鋭く刺してくる昏い^{くら}予兆に、小さく震えていた。

* * *

約束の夜から、一年の後。

約束は未だ果たされていない。

戦の魔手は今まで戦禍を免れていたカーリナの村にまで及び、甚

大な被害をもたらした。

家々は焼かれ、多くの村民が死傷した。敵軍に生け捕りにされた者もいた。

累々と重なる屍の中、敵軍の捕虜の中に、カーリナの姿はなかった。ユルキが村に戻った形跡もなかった。

戦の焰ほむろと煙霞は今もって消えず、ますます広がり、多くの悲憤と怨嗟を生んだ。

そしてカーリナとユルキ、二人の消息は杳として知れない。

二人があの日、屋根の上で交わした約束が果たされたのか否か、それを知る者はなく、あの夜と変わらぬ冷涼たる星だけがそれを知るように、訳知りな瞬きを地上に落していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1271z/>

A collection of short stories

2011年12月13日19時56分発行